

七世紀～十世紀初の中国における上流階層の家族形態

——墓誌を中心に——

翁 育 瑄

まえがき

中国古代の家族形態については、特に、漢代の家族形態について、多くの論著がある。だが魏晉南北朝と隋唐五代における家族の研究は貴族制度に関わる研究に偏る傾向が見られる。個別の大貴族の研究論著はこの時期の研究の特徴といえるのではないだろうか。⁽¹⁾ 一方、貴族以外の家族形態については、池田温氏が、天宝年間の敦煌差科簿に見える三三八戸につき分析して、一般住民の半分弱が丁男一人の核家族であったことがわかつていいる。差科簿登載男系家族に関しては、兄弟以外の傍系親族を含む戸は全体の一割程度に限られていた。それは、父母いずれかが生存する限り析戸しえぬ法制下における小家族の実情を反映している。そして、敦煌差科簿の各戸等の戸当丁数を見ると、中等、上等戸の官人や富農階層の家族形態は大家族型を主としていたと推測できる。⁽²⁾ 唐律では祖父母父母が生存している限り、子孫は別籍異財が禁じられていたことは周知の通りであるが、実態は大いに異なると思われる。差科簿の例から核家族は依然として庶民階層の

主な家族形態であったことが証明されるのである。

一九八〇年代以来、各研究機構や個人に所蔵されていた大量の墓誌関係の拓本集が相継いで公開された。これによって、上流階層の家族の研究に対して、墓誌銘は大切な役割を担っていることが鮮明になり、この数年、墓誌銘に関わる論文もつぎつぎと発表された⁽³⁾。本稿も墓誌材料に基づいて、七世紀から一〇世紀初、つまり、隋から五代までの上流階層の家族形態を探ることを試みたい。

一、検証対象となる家族の抽出

現在みることでできる墓誌の拓本は五千余点ある。拓本と唐人文集に収録される墓誌草稿に基づき、それぞれの墓誌主の間の親族関係を整理することにより、さまざまな家族を見出し得る。さらに、『新唐書』宰相世系表と『元和姓纂』に残った系図と照らし合わせて、そのうちの一二家族を、本稿の研究対象として提出したい。その一二家族は次の通りである。

(1) 博陵崔氏第二房儼系

この家系の墓誌には主に崔暲とその子孫が記録されており、そのなかで、崔暲の孫崔祐甫とその養子の崔植が宰相になっている。墓誌からはこの家族は寡婦と孤児に対してよく面倒をみたことが知られ、それを含め、家族の強い繋がりがしばしば記載されている。なお、儼約と儼しい家法もこの家族の特徴である⁽⁴⁾。

(2) 清河崔氏南祖融系

この家系の中では崔從の子孫の墓誌が多く見られる。時期は唐後期から五代の梁までのものである。そのうち、崔從の息子崔慎由は宣宗時期の宰相であり、崔慎由の子である崔胤は後の昭宗時期の宰相である⁽⁵⁾。

(3) 清河崔氏大房元彦系

この家系は主に崔隱甫の子孫の墓誌である。崔隱甫本人は玄宗時期の名臣である。⁽⁶⁾

(4) 清河崔氏小房志道系

崔志道の孫崔湛とその二子崔虔、崔朝の子孫がこの家系の中心である。崔朝の孫崔羣と崔虔の曾孫崔彦昭は宰相になったことが知られる。⁽⁷⁾

(5) 清河崔氏鄭州房幼系

この家系に見られる墓誌は崔幼の二子崔彦穆と崔彦昇の子孫を中心に伝わる。崔彦穆の曾孫崔元綜は武后時期の宰相として知られる。⁽⁸⁾

(6) 范陽盧氏北祖陽烏大房思道系

陽烏大房で墓誌が一番多く伝わるのは盧思道の家系である。そのうち、盧思道の子盧赤松の息子盧承業と盧承基の家系が中心である。盧赤松は唐高祖李淵の旧友であり、さらに、創業期に彼の軍を支援した。そのため、家族数人が唐の初期に高官になっていた。盧赤松の息子盧承慶は後に高宗の宰相をつとめる。なお、盧赤松の曾孫黃門侍郎盧藏用もよく知られている。⁽⁹⁾

(7) 范陽盧氏北祖第二房文構系

この家系の墓誌は盧文構の孫、盧幼孫の二子盧獻と盧操の家系を中心に伝わる。盧獻の玄孫盧商は宣宗時期の宰相である。⁽¹⁰⁾

(8) 范陽張氏次惠系

唐の中興の功臣、武后・中宗時期の宰相張柬之はこの家系の中心人物であり、この家系の繁栄は張柬之と密接な関係がある。張柬之の失脚と死亡は、この家系に相当な打撃を与えたい。⁽¹¹⁾ 家族墓を都に移さず、故郷の襄陽に置いたことは注目される。

(9) 樂安孫氏嘉之系

この家系の墓誌は孫嘉之の四子孫逖、孫通、孫邁、孫造の家系を中心に伝わる。洛陽で大規模な家族墓を営んだことが注目される。なお、進士出身の者が多いことはこの家系の特徴である。孫邁の曾孫、孫偃は昭宗の宰相を務めたことが知られる。⁽¹²⁾

(10) 昌黎慕容氏紹宗系

十六国の君主の後裔である慕容氏は鮮卑系貴族の代表の一つである。この家系の墓誌は慕容三蔵の二子慕容正言と慕容正則の子孫を中心に伝わる。先代の慕容紹宗と慕容三蔵が軍事才能によって知られたのに対し、子孫は文官として仕えていることが、鮮卑系貴族の変化として注目される。⁽¹³⁾

(11) 上谷寇氏思遠系

この家系では寇思遠の四子寇洋、寇洸、寇溶、寇澧の家系の墓誌が伝わる。寇章墓誌によると、寇氏一族は当時の上流社会で活躍していることがわかる。⁽¹⁴⁾

(12) 瑯琊支氏光系

西域の月支出身の祖先、石趙の司空支雄をもつことがこの家系の名字「支」の由来であるということが『元和姓纂』に述べられているが、⁽¹⁵⁾この家系は『新唐書』宰相世系表と『元和姓纂』ともに見当たらない。鴻臚卿になった支疎の遺言によつて大中一〇年に大規模な移葬を行ったことに、この家族が洛陽に落ち着こうとする決意を見て取ることができる。⁽¹⁶⁾

(13) 安定張氏処節系

この家系も『新唐書』宰相世系表と『元和姓纂』には見当たらない。墓誌によると、この家系は五胡十六国のひとつ前涼の張軌の子孫と自称していた。⁽¹⁷⁾

上述の一三家族はいずれも三世代以上にわたり、墓誌の数量が九点以上であるものを選んだ。なお、墓誌に記される埋

葬地から各家族の分化状況が伺える。例えば、清河崔氏鄭州房幼系のうちの崔思約系の墓誌は河南縣平樂郷と記されるが、崔善福系の墓誌は合宮縣金谷郷昭覺原と記されている。⁽¹⁸⁾ 范陽盧氏北祖第二房文構系の場合、盧文構、盧文機兄弟と盧文構妻李月相は本籍の范陽に葬られたが、玄孫の盧翊の世代には洛陽に葬られている。ただし、盧翊の子盧昂と盧晏兄弟とその子孫の墓誌は金谷郷焦古村と記しているが、盧政系の墓誌は平陰郷陶村と記している。⁽¹⁹⁾ これらの家族は同じく邙山に家族墓を持っているのであるが、埋葬地が系列によって異なる事実から、どの世代からかは不明であるが、家族が分化したと考えられる。

後漢から累世同居し、家学を代々伝える家族、いわゆる士族（貴族）が出現した。彼らは魏晋南北朝の政治的に不安定な時期をへて、隋唐帝国においても社会的に高い地位に恵まれていた。この間何百年もの間、彼らは郡望という祖先の本籍を称していたが、子孫の人数の増加にしたがって、いくつかの「房」に分裂して、家族形態は複雑になった。また、家族の子孫の一部分は任官によって、本籍から離れ、本籍に残る子孫としだいに連絡を失っていき、宗族の関係は、族譜を通しての結び付きのみとなっていた。これが家族の最初の分化であるが、さらに移住した家族がさらに分化して墓葬地を別にするようになるわけである。

墓誌からは様々な家族墓所在地の確立の仕方が見られる。例えば、博陵崔氏第二房儼系の場合、先代は長安で葬られたが、崔暉のときから洛陽で葬ることを始めた。しかし、洛陽が権葬地（仮の埋葬地）から帰葬地に転換されたのは崔暉の孫崔祐甫の決定であった。戦争のため、長安に帰葬する条件が悪くなり、洛陽に定住してから四代目ともなることから、洛陽を帰葬地にしたいという願いが墓誌に述べられる。⁽²⁰⁾ 唐代の士大夫階層が洛陽で家族墓を営みたいという意図をもっていたことは前に述べた瑯琊支氏光系の墓誌が示している。唐代の士大夫たちにとって、洛陽は長安とはちがひ、住みやすいように感じられた。洛陽の経済条件は長安より優れており、長安の政治的雰囲気は洛陽には見られない。そのため、失脚した者や退官した者が洛陽に集まってきた。これが洛陽から出土した墓誌が長安より二倍も多い原因であろう。もっと

も洛陽以外にも家族墓所在地がある。張東之一族の家族墓は本籍の襄州安養縣相城里にある。墓誌からみると、傍系の張軻、張盈と妻蕭飭性は洛陽で葬られたが、張東之は両親と弟たちの墓を本籍に置いていた。⁽²¹⁾ この家族は家族墓を洛陽に移していない少数事例である。⁽²²⁾

洛陽で家族墓を営む家族も時期によって、埋葬地が変わることがある。例えば、樂安孫氏嘉之系の場合、前期の墓誌では陶村（平陰郷）に記される事例が多いが、後期の墓誌では平樂郷杜翟村と杜郭村の記録がよく見られる。⁽²³⁾ 子孫が系列によって墓域を異にするのではなく、孫嘉之の子孫が時期によって墓地を変えているのである。葬るべき人数が増えるにしたがって、家族墓の範囲は隣接の地域に広がる可能性が理由として考えられる。

また、家族の墓誌を検討して注目すべきことは同日葬の多さである。当時の人たちにとって、帰葬は極めて大事なことであったが、何らかの事情で他所に権葬していたいくつかの遺骸を、同時に帰葬（あるいは改葬）させる。これが同日葬の多さの主な原因である。⁽²⁴⁾ もっとも、死亡時間が近いことも同日葬の一因となる。例えば、同じ咸通一二（八七一）年二月五日に葬られた孫瑄と妻李氏、娘孫泳（樂安孫氏嘉之系）の場合、三人はそれぞれ咸通一二（八七一）年六月三日、咸通一一（八七〇）年十二月七日、咸通一二（八七一）年一月二十八日に亡くなった。⁽²⁵⁾ 短い間に相継いで死亡したことが同日葬の原因であろう。同日葬という特徴は家族系図の整理に役立つ。例えば咸通三年一〇月八日の「唐朝散大夫攝邕州長史兼監察御史上柱国瑯琊□公夫人崔氏墓誌銘并序」の場合である。⁽²⁶⁾ 『国立北平図書館藏碑目』は崔氏の夫を「王」とする。しかし、内容から見ると、崔氏の舅は「鴻臚卿贈工部尚書」、姑は「魯国太夫人」である。同じ日に葬られた支志堅（瑯琊支氏光系）の墓誌によると、支志堅の父支疎は「鴻臚卿致仕工部尚書」、継母崔氏は「魯国太夫人」に封ぜられた。⁽²⁷⁾ よって、支志堅の両親は崔氏の舅姑であることが明らかにになる。崔氏が瑯琊支氏の家族であることは間違いない、崔氏の夫邕州長史は支志堅の兄弟であることが推測できる。□は「王」ではなく、「支」の方が正しい。

埋葬地の記載のほかに、墓誌の内容から、これらの家族が唐代の戦争によって、流離した事がわかる。多くの悲劇や離

別がこの時期の墓誌から読み取れる。また、墓誌から、科挙が当時の貴族の中で占めていた地位がうかがえる。旧貴族であろうが新興階層であろうが、彼らにとって仕官する一番良い方法とは科挙である。これら旧貴族の子孫も、時代の移り変わりの中、門閥貴族から官僚貴族へと変わってゆく。彼らも科挙試験の競争に加わり、家を養うためには、下級官吏の仕事をせざるをえなかった。だんだんと貧困生活に陥る旧貴族の子孫は、しかし名門であることを誇りとしていたことが、墓誌からうかがえる。そのほかに、墓誌の執筆者と墓誌主の関係から、家族間の付き合い、当時の上流社会の人間関係も少し伺い知ることができる。

二、同居形態から見た上流階層の家族形態

同居と同籍すなわち同じ戸籍という概念はすでに秦律から見られる。⁽²⁸⁾ 唐代の同居について、例えば李慈墓誌には「数代同居、闔門百口」、沈浩豐墓誌には「闔門兩百口」と書かれる。⁽²⁹⁾ これはもちろん概念的な数字であって実体ではない。百や二百という概念的な数字で家族を示す事例は史書にしばしば見られる。他方、崔衆甫妻李金墓誌（博陵崔氏第二房儼系）にある「一百八口」というのは確実な数字の例といえよう。⁽³⁰⁾ ただし、この一〇八人の同居は安史の乱のとき、崔氏家族が集団で疎開したという一時的な状況によるものである。普通の時期にはそのような数には達していないと思う。

家族の同居の状況については墓誌を比較検討することによって一定程度知り得る。例えば、崔茂藻（清河崔氏小房志道系）の場合、彼は母親に奉仕するために、就職を急ぐ必要があった。科挙の資格は持っていなかったようだが、最後は従兄弟の崔彦昭のおかげで、交城尉に就任できて、四〇才で死ぬまで独身であった。彦求という弟がおり、崔茂藻の家族は母親と兄弟同居の家族である。⁽³¹⁾ 一方、同じ清河崔氏小房志道系の「鄭氏妻崔琪墓誌」には、

開成中、先府君は故相国伯文の履道の里第に於いて棄養す。⁽³²⁾

表一

家族名	没年	墓誌主	没所	享年
博房	七二一	崔愷妻王媛	東都崇政里第	七四
陵儼	七三四	崔沔妻王方大	東都崇政里	五〇
崔系	七五四	崔敞愛夫盧招	東都崇政里崔氏之館	五三
氏	七九四	崔衆甫後妻李金	東都崇政里	六八
第二	八二三	崔倭	洛陽時邕里	七一
清崔南融	八七〇	崔倭娘崔氏	東都時邕里第	六三
河氏祖系	九一八	崔柅妻李珩	東京利仁坊之官舎	五五
清	九二〇	崔崇素	東京利仁坊之官舎	二一
河	七八六	崔微妻盧氏	洛陽毓德里之私第	六一
崔	七八八	崔泳	洛陽毓德里之第	四三
氏	八〇三	崔千里妻李氏	洛陽毓德里之私第	六一
大	八六五	崔行規妻鄭娟	洛陽毓德里之世第	四五
房	八六八	崔行規	洛陽毓德里之世第	五一
元	八三六	崔洵	東都教業坊之私第	五四
彦	八五一	崔芑	東都教業里	六四
系	八四〇	崔揆母林氏	洛陽県殖業里第	六四
清崔小志系	八七三	崔洵側室張紫虛	東都殖業里	六八
河氏房道	七九八	崔程	東都福先之仏寺	五一
清崔鄭房系	七九九	崔禰後妻王氏	東都福先寺	三七
河氏州幼	七〇〇	崔哲	毓德里之私第	六九
范大系	七一九	崔同穎	洛陽毓德里之私第	六四
陽房	六八三	盧承業妻李灌頂	神都德懋里之第	六四
盧思	七四一	盧全貞妻李氏	東都洛陽德懋里之私第	四八
氏道	七五一	盧澄	東都德懋里第	二三
范第系	七五六	盧全嗣娘盧氏	洛陽県德懋里之私第	一九
陽二	八二三	盧直	東都康俗里	五三
	八三〇	盧方	康俗里之私第	六三

（開成中、先府君棄養於故相国伯文

履道之里第。）

とある。崔瑛の父崔章は、開成年間（八三六―八四〇年）に従兄弟崔羣の洛陽の履道里の邸宅で亡くなった。『旧唐書』卷一五九「崔羣伝」によると、崔羣はその少し前の八三二年に六一才で死んでいる。つまり、崔羣のの兄弟とその家族は、崔羣の死後も履道里に住み続けたことが知られる。崔羣家族は従兄弟が同居する家族であることがわかる。

没所の検討から家族の同居形態を見てみよう。一般に墓誌は墓誌主の没した場所を記すことになっている。自分の家で死んだ場合は「某地私第」、「某地第」、「某地私舍」などと記す。別荘で死んだ場合は「某地別業」、「某地別舍」、「某地別荘」などと記す。任官地

盧房	氏政	梁	安	孫	氏	嘉	之	系		上寇思系	谷氏遠	瑯支光	瑯氏系
八三二	八七八	七三九	八〇一	八〇一	八〇五	八〇七	八五五	八五五	八二二	七二三	八七一	八七八	
盧直妻崔氏	盧陟娘盧染娘	孫嘉之	孫嬰	孫嬰娘孫氏	孫成妻盧氏	孫成娘孫氏	孫側	孫向妻李氏	孫起	寇釗	支訢妻鄭氏	支訢	
河南康俗里第	東都康俗里	東都集賢里之私第	集賢里之私第	集賢里之私第	洛陽之康俗里	東都康俗里第	東都河南具敦化里之別第	東都敦化里之私第	鄭州別業	洛陽審教里之私第	行脩之里第	洛宅行脩里	
四六	二一	八三	五七	不明	五六	三三	一九	二四	六九	二二	不明	五六	

で死んだ場合は「某地官舎」、「某地廨宇」、「某地理所」などと記す。借家あるいは仮住まいで死んだ場合は「某地僦舎」、「某地税舎」、「某地寓居」などと記す。一三家族の中で、没所が同じ人をまとめてみると、表一のようになる。

没所が同じというのは、死ぬ前同じところに住んでいたことを示すと考えられる。もし、ある墓誌主がある里（あるいは坊）の私宅で亡くなり、ほかの家族も同じ里（坊）で亡くなったら、彼らは同じ屋敷に住んでいたと見なすべきだと思われる。さらに、各家族の同居形態を分析するとき、次の判断を前提におくことができよう。

(1) 従兄弟同居家族は恐らくその父親の世代から同居していて、兄弟同居家族は両親が生きているうちから同居している。

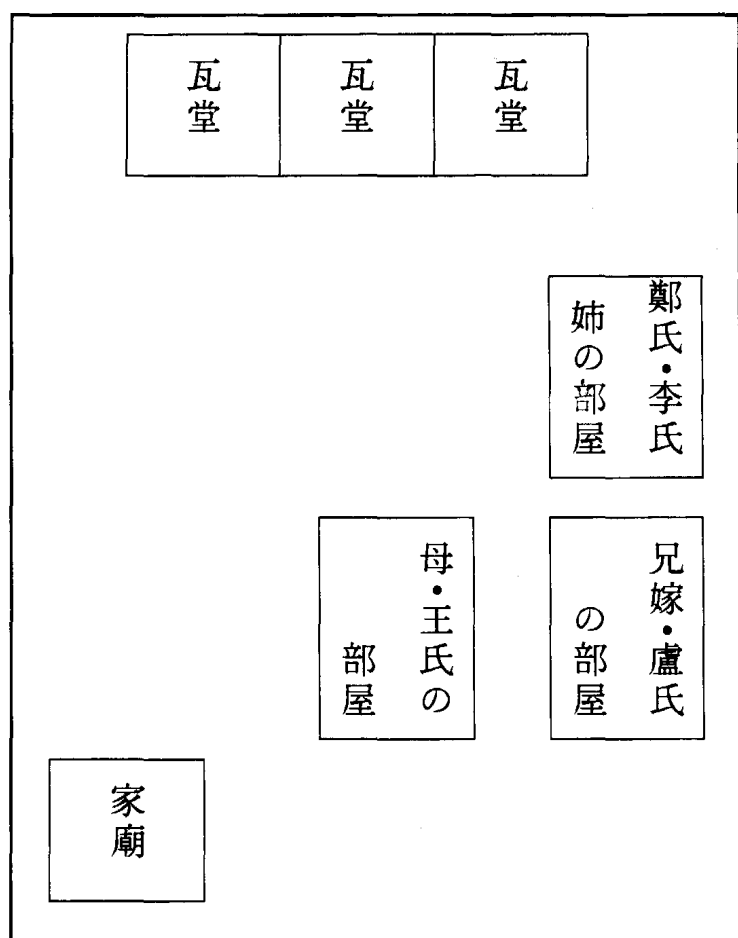
(2) 各墓誌主の没年からその屋敷に何年ぐらい住んでいたかが知られる。

この前提に基づけば、例えば、次のような推論を行うことが可能となる。同じ屋敷で死亡した二人が従兄弟同士の場合、従兄弟の同居は必ずその父親の世代から始まり、その父親たちの同居は彼らの両親の生きているうちから存在しているの³³で、この家族の同居は三世代にわたっていることが推測できる。つまり、祖父母から従兄弟までの三世代である。さらに、従兄弟同士の子供も含めば、この家族の同居は四世代にわたっている。この家族は「四代同居」家族なのである、と。

なお、同居という場合、地方に就官している者とその家族をどう考えるべきかという問題がある。「同居」は「同籍」と同じ意味であると当時認定されていた。地方に仕官している家族も同籍であれば同居に含まれる。本稿では同居を同時期に同一地に居住していることに限定せず、何世代かにわたって、同じ家に住んだことを指すとしておく。上述の原則に基づき、表一に現れた家族の同居形態を分析して行こう。まずは博陵崔氏第二房儼系家族の場合であるが、この家族が洛陽の崇政里の私宅に住むことは崔沔から始まる。崔沔が崇政里の私宅を買い取ったのは父と兄が死んだあとである。父の崔暉は七〇五年に洛陽の履道里で亡くなり、まもなく兄の崔渾も亡くなった。³³崇政里の私宅のことは顔真卿「通議大夫太子賓客東都副留守雲騎尉贈尚書左僕射博陵崔孝公陋室銘」（以下「崔沔陋室銘」と略）に次のように記される。

延和・太極の間、公既に東都に留司す。遂に乗る所の馬を鬻り、故人監察御史張泌の子深の河南府崇政坊に就きて宅を買いて以て居を製す。宗廟を西南に建て、維れ先太夫人安平郡夫人の堂は宅の中に在り。儉にして陋ならず、浄にして華ならず、六十餘年、榱棟故の如し。堂の東は嫂盧夫人の居る所、堂の東北は鄭氏李氏姉の婦寧して居る所、堂の北五歩の外、瓦堂三間を建て以てここに居る。雑えて旧椽を用い、壇を崇くせず、楮堊なし。清要を累歴し、得る所の祿秩、但だ烝嘗に奉じ、嫂姉に資し、孤幼に給し、甥姪の婚姻を営むのみ。朝馬衣服、一に皆其の下なる者を取る。唯だ祭器祭服は礼に称う。其の室ついに修まらず。⁽³⁴⁾

図1、崇政里邸の間取り図

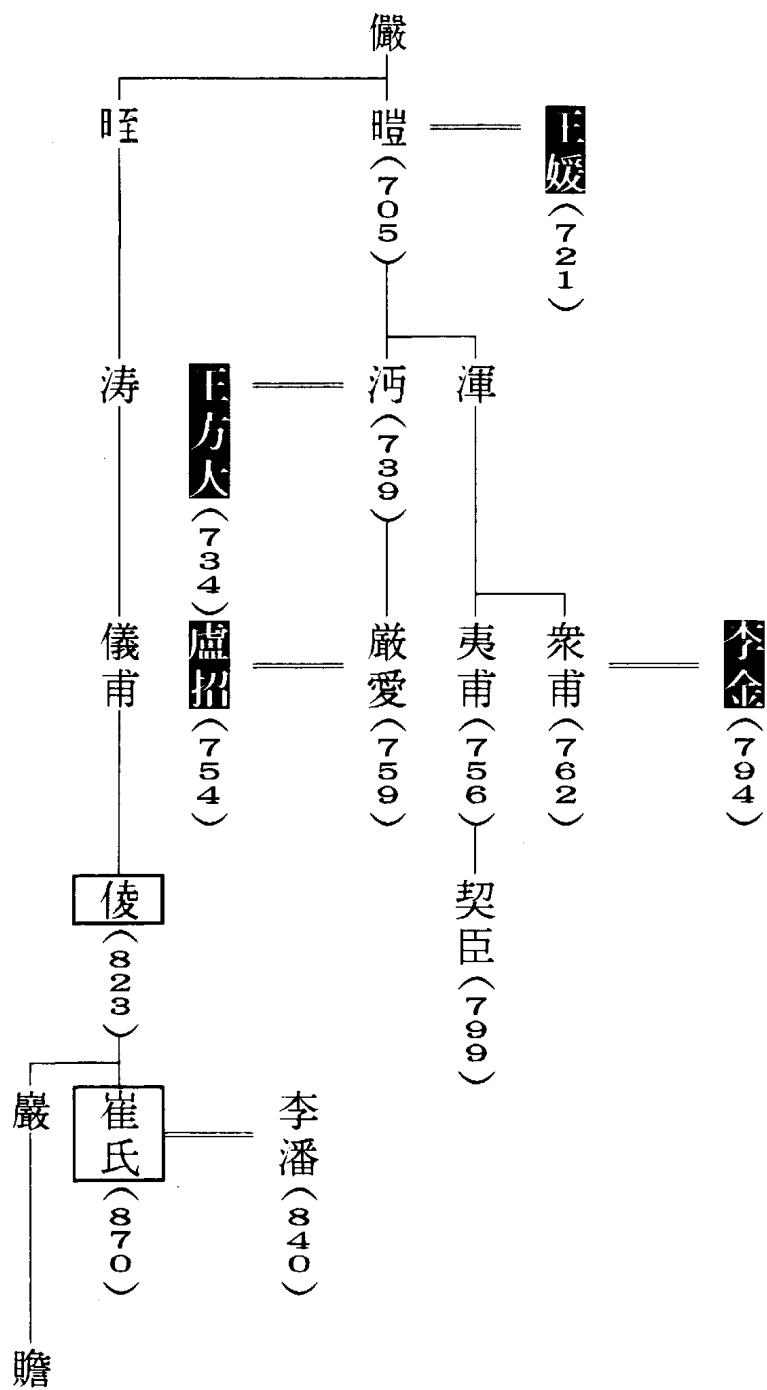


(延和・太極之間、公既留司東都。遂鬻所乘馬、就故人監察御史張泌子深河南府崇政坊買宅以製居。建廟於西南、維先太夫人安平郡夫人堂在宅之中、儉而不陋、浄而不華、六十餘年、榱棟如故。堂東嫂盧夫人所居、堂之東北鄭氏李氏姉婦寧所居、堂之北五歩之外、建瓦堂三間以居之。雑用旧椽、不崇壇、無楮堊。累歴清要、所得祿秩、但奉烝嘗、資嫂姉、給孤幼、営甥姪婚姻而已。朝馬衣服、一皆取其下者。唯祭器祭服称礼焉。其室竟不修。)

この記述から、崇政里邸の間取りが図1のように再現できる。また崔沔が儉約家であり、寡婦の兄嫁と姉及び甥姪たちの世話をしていることがわかる。崇政里で

図2、博陵崔氏第二房儼系同居形態

■：崇政里 □：時邕里 ○：没年

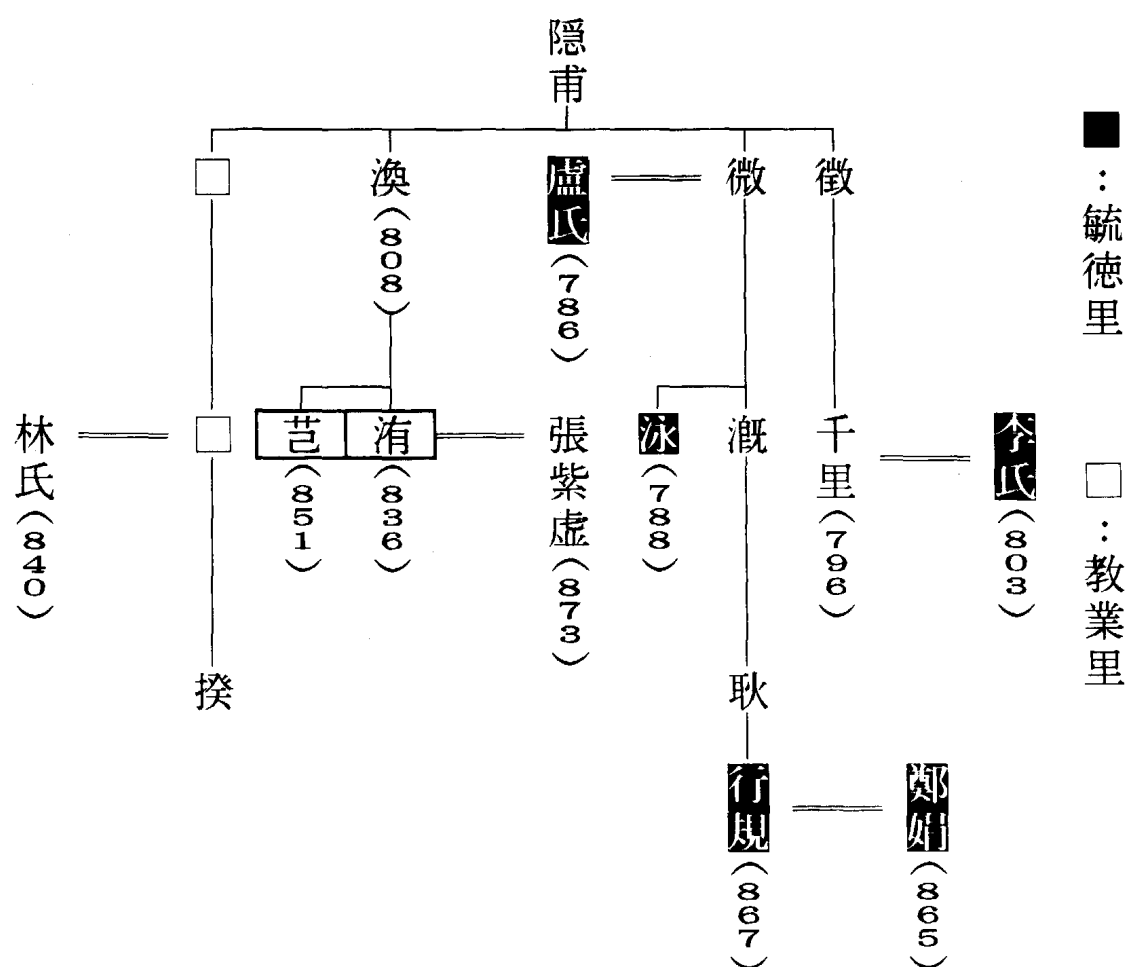


人は同年の十一月に「居守の内館」、おそらく同じ東都副留守の官舎で没したと考えられる。⁽³⁶⁾「崔沔陋室銘」には、⁽³⁷⁾夫人太原郡太夫人王氏床帳を捐つるにおよぶの後、公他室に徙居し、或いは賓館に在り、而して常所なし。⁽³⁷⁾（梟夫人太原郡太夫人王氏捐床帳之後、公徙居他室、或在賓館、而無常所。）

亡くなった者は、崔沔の母王媛、妻王方大、婿盧招と甥衆甫の妻李金がおり、⁽³⁵⁾三世代にわたっている。さらに李金が六八才で亡くなったとき、周りに世話していた甥たちがいたはずである。これによって、

崇政里邸の歴史は四世代にわたったと考えられる。王媛の没年の七二一年から李金の没年七九四年まで、崔氏家族が崇政里に住んだ期間は七三年を越える。しかし、この間、崔沔の兄渾の孫娘崔攀は七三九年の八月に崔沔の東都副留守の官舎で亡くなり、崔沔本

図3、清河崔氏大房元彦系同居形態

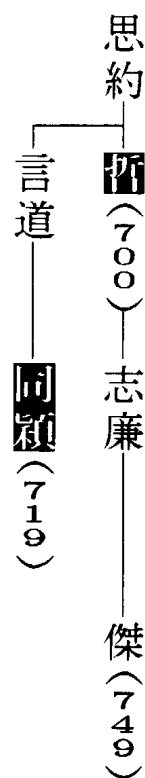


と、妻の王方大が亡くなった後、崔沔が殆ど崇政里の家にいなかったことを記す。これは崔沔が七三九年に「居守之内館」で亡くなったことにつながる記述である。崔沔の家族の一部は東都副留守の官舎に住んでいた可能性がある。崔沔の息子祐甫は七八〇年に宰相の任期中に長安の静恭里で亡くなった⁽³⁸⁾。ほかに、崔沔の従兄弟崔濤の孫崔俊とその寡婦の娘崔氏が洛陽の時邕里で亡くなっている⁽³⁹⁾。崔俊から孫の崔瞻まで、時邕里邸における同居は三世代にわたった。崇政里邸の記録が八世紀、時邕里邸の記載が九世紀と時期を異にしているが、崔俊系は崇政里の同居に含まれないと考えてよいのではないか。なお、崔祐甫は息子がいないため、従兄弟の崔嬰甫の子崔植を養子として迎えたが、崔植も後ほど宰相になった⁽⁴⁰⁾。崔植の孫崔紆は八七三年に洛陽の敦行里で亡くなり、崇政里の記載は彼の墓誌に見られない⁽⁴¹⁾。(図2 参照)

清河崔氏南祖融系の場合、後梁貞明四(九一八)年に没した崔杞の妻李珩と貞明六(九二〇)年に没

図4、清河崔氏鄭州房幼系の同居形態

■：毓德里



した別子(庶子)の崔崇素がともに「東京利仁坊の官舎」で亡くなった⁽⁴²⁾。それは崔杞の西都(洛陽)留守副使時の官舎と考えらる。崔杞の在任中の妻子の死であり、同居の事例検証には役立つところはない。

清河崔氏大房元彦系の場合、洛陽毓德里邸での同居は崔隱甫の二子崔徵、崔微の家系にしばらくられる。崔微の子

崔千里の妻の李氏、崔微の妻盧氏、息子の崔泳、曾孫の崔行規と妻の鄭娟の五人は毓德里邸で亡くなった⁽⁴³⁾。なお、崔微の孫、崔行規の父崔耿も「寇章墓誌」にその毓德里邸のことを話したと記される⁽⁴⁴⁾。盧氏の没年の七八六年から、崔行規の没年の八六七年まで、毓德里邸における居住期間は八一年を数え、崔隱甫から崔行規の子供まで、六世代にわたった。しかし、崔渙の二子崔洧、崔芑がそれぞれ八三六年と八五一年に洛陽の教業里邸で亡くなっていて、教業里邸の居住期間が五年あることを確認できるとともに、この系統が毓德里邸を離れた可能性を示唆する⁽⁴⁵⁾。ほかには、崔隱甫の曾孫、父祖不明の崔揆の母林氏と崔洧の側室の張紫虚が洛陽の殖業里で没した⁽⁴⁶⁾。林氏は無論、息子の崔揆の自宅で死んだのであるが、張紫虚は次女の夫の王寓の家で亡くなったではないかと思われる。(図3参照)

同じく洛陽福先寺で亡くなった清河崔氏小房志道系の崔程と兄嫁の王氏の事例は同居の検証には特に寄与しない⁽⁴⁷⁾。なお、宗教の原因かどうか不明であるが、お寺で死んだ事例が墓誌によく見られる⁽⁴⁸⁾。福先寺は洛陽の名寺で、上流社会との繋がりが考えられる⁽⁴⁹⁾。

清河崔氏鄭州房幼系の洛陽毓德里邸での同居は崔彦穆の孫崔思約の家系に見られ、崔思約の子崔哲と甥の崔同穎が毓德里邸で死んだ⁽⁵⁰⁾。崔哲の孫崔傑が洛陽の宣教里邸で亡くなったことから考えると、毓德里邸の同居は崔思約から崔同穎までの三世代にわたったと見られ、確認できる居住期間は一九年を越える。(図4参照)

図5、范陽盧氏陽烏大房赤松系の同居形態

■：德懋里

李灌頂(683)

李氏(741)

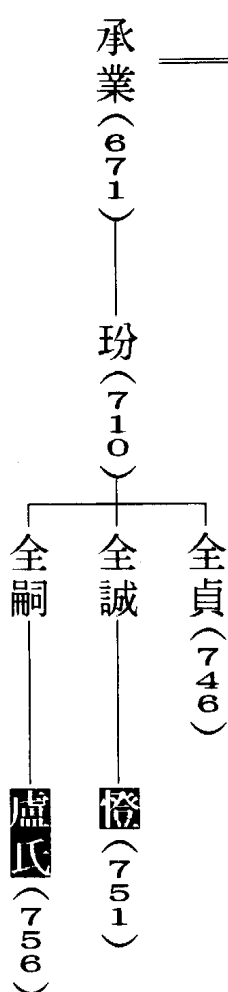
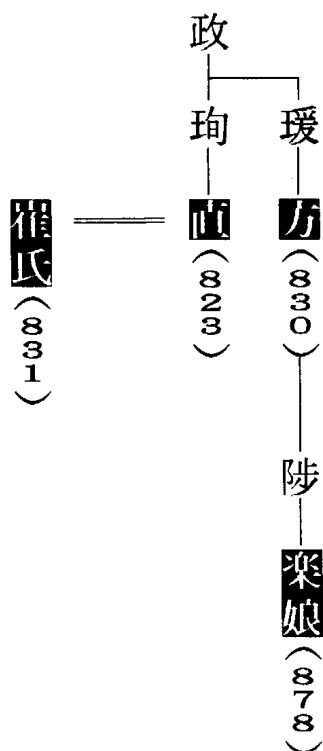


図6、范陽盧氏第二房文構系の同居形態

■：康俗里



范陽盧氏陽烏大房赤松系の場合、盧承業系が洛陽の德懋里に居住していたことが注目される。德懋里で亡くなった者には盧承業の妻李灌頂、盧全貞の妻李氏、盧全誠の子盧澄、盧全嗣の娘盧氏がいる。⁽⁵²⁾ 盧氏は若いときに死んだので、結婚していない。この一族の德懋里での居住は李灌頂から始まると考えられ、盧澄と盧氏まで、その期間は四世代にわたった。李灌頂の没年の六八三年から盧氏の没年の七五六年まで、この家族の德懋里居住は少なくとも七三年を越える。注目されるのは聖武二(七五六)年に死んだ盧氏のことである。聖武は安祿山の年号であるから、洛陽が占領された期間に盧氏家族はまだ德懋里に残っていたことが推測できるのである。德懋里に居住が見られた間に、盧承業の甥盧調は洛陽の隆化坊で没した。⁽⁵³⁾ 盧承業のもう一人の甥盧行毅の妻辛氏は洛陽の帰德里で死んだ。⁽⁵⁴⁾ よって、盧承業とその兄弟たちは同居していないと断定できる。盧承業の息子盧玠はおそらく東都留守の官舎と思われる「東都官舎」で没した。⁽⁵⁵⁾ 前に述べたように、崔沔が東都副

留守の官舎で亡くなっていることから、東都留守の官員たちは一般に官舎に住んでいたことがわかる。(図5参照)

次は范陽盧氏第二房文構系の場合である。同じ洛陽の康俗里で没したのは盧直と妻崔氏及び盧方と、二一才で亡くなったその孫娘盧樂娘である。⁽⁵⁶⁾なお、『通幽記』に貞元九(七九三)年盧瑗の洛陽康俗里の私宅のことが記載されている。⁽⁵⁷⁾盧直と盧方は従兄弟関係で、盧瑗は盧方の父である。とすれば、この一族の康俗里の居住は盧方の祖父盧政のときから始まった可能性が強く、盧政から盧樂娘まで、五世代にわたったと考えられる。『通幽記』の記述する七九三年から盧樂娘が死んだ八七八年まで、康俗里における居住は少なくとも八五年を越える。この間、盧政の孫、科挙落第生の盧景脩は八三一年に長安の光福坊の李氏家廟で死んだ。⁽⁵⁸⁾もう一人の孫盧踐言は京兆府涇陽県尉の任期中、八四六年に長安の靖安里で、曾孫の国子助教盧當は八五四年に長安の宣平里で没している。⁽⁶⁰⁾(図6参照)

樂安孫氏嘉之系の場合であるが、この家族の墓誌はかなり多く、ほかの家族より多く資料が見られる。この家族の同居形態は孫嘉之の四人息子——孫逖・孫通・孫邁・孫造及び彼らの子孫を中心に構成される。孫逖は自分が書いた父孫嘉之の墓誌に、孫嘉之が七三九年に洛陽の集賢里で亡くなったと述べている。⁽⁶¹⁾八〇一年に死んだ孫嬰とその娘の孫氏も集賢里が没所である。⁽⁶²⁾孫嬰は孫嘉之の四男孫造の子である。孫嘉之が没した七三九年から、孫氏が没した八〇一年まで、六二年が数えられる。しかし、孫逖の子で孫嬰の従兄弟にあたる孫成の妻盧氏とその娘の孫氏は洛陽の康俗里で死んだ。⁽⁶³⁾盧氏の墓誌に、

初め府君桂林に廉省するに、天実禍を降す。男子未だ仕えず、女子未だ笄せず、郷閔は日達し、雲水は天際。夫人孤稚を提げて、帷慌を奉じ、克く龜筮に詢り、返りて瀍洛に葬る。門戸再び立ち、戚姻帰するが如し。⁽⁶⁴⁾

(初府君廉省桂林、天実降禍、男子未仕、女子未笄、郷閔日達、雲水天際、夫人提孤稚、奉帷慌、克詢龜筮、返葬瀍洛、門戸再立、戚姻如帰。)

という。孫成は七八九年に桂州で亡くなり、盧氏は子供たちを連れて、孫成の柩を洛陽の家族墓に帰葬したのである。⁽⁶⁵⁾「門

戸」を再び立てたのは、盧氏が孫氏家族とは同居せず、子供たちと康俗里に住んでいたことを示すものだろう。なお、安祿山洛陽占領期の顯聖二年に孫成の弟孫視は洛陽の章善里の「私室」で死んだ。⁽⁶⁶⁾これによって、孫嬰の世代のとき、従兄弟の孫成兄弟は集賢里に住んでいなかったことが分かる。孫嬰のもう一人の従兄弟、孫起と娘の廿九女とは鄭州別業で没した。⁽⁶⁷⁾孫起の孫、孫側（孫向の子）、嫁の李氏（孫向の妻）、孫娘の孫氏（孫解の長女）の三人は洛陽の敦化里で没した。⁽⁶⁸⁾八七〇年に洛陽県尉の任期中に死んだ孫備（孫起の孫、孫景商の子）も多分敦化里に住んでいた。⁽⁶⁹⁾孫側と李氏はともに八五五年に没し、孫解の長女孫氏は一六才の若さで八七四年に没し、この間一九年を越えている。孫起から孫側の長女孫氏まで四世代にわたって敦化里に住んでいたことになる。この間、孫起の三番目の妻裴氏は八四一年に長安の親仁里で死に、孫備の妻于氏は長安の永樂里で死んでいる。当時孫備は郷貢進士の身分だった。⁽⁷⁰⁾『玉堂閑話』に孫偃が長安に数世代にわたって住んだ邸宅があるというのは、永樂里のことを指すのかもしれない。⁽⁷¹⁾

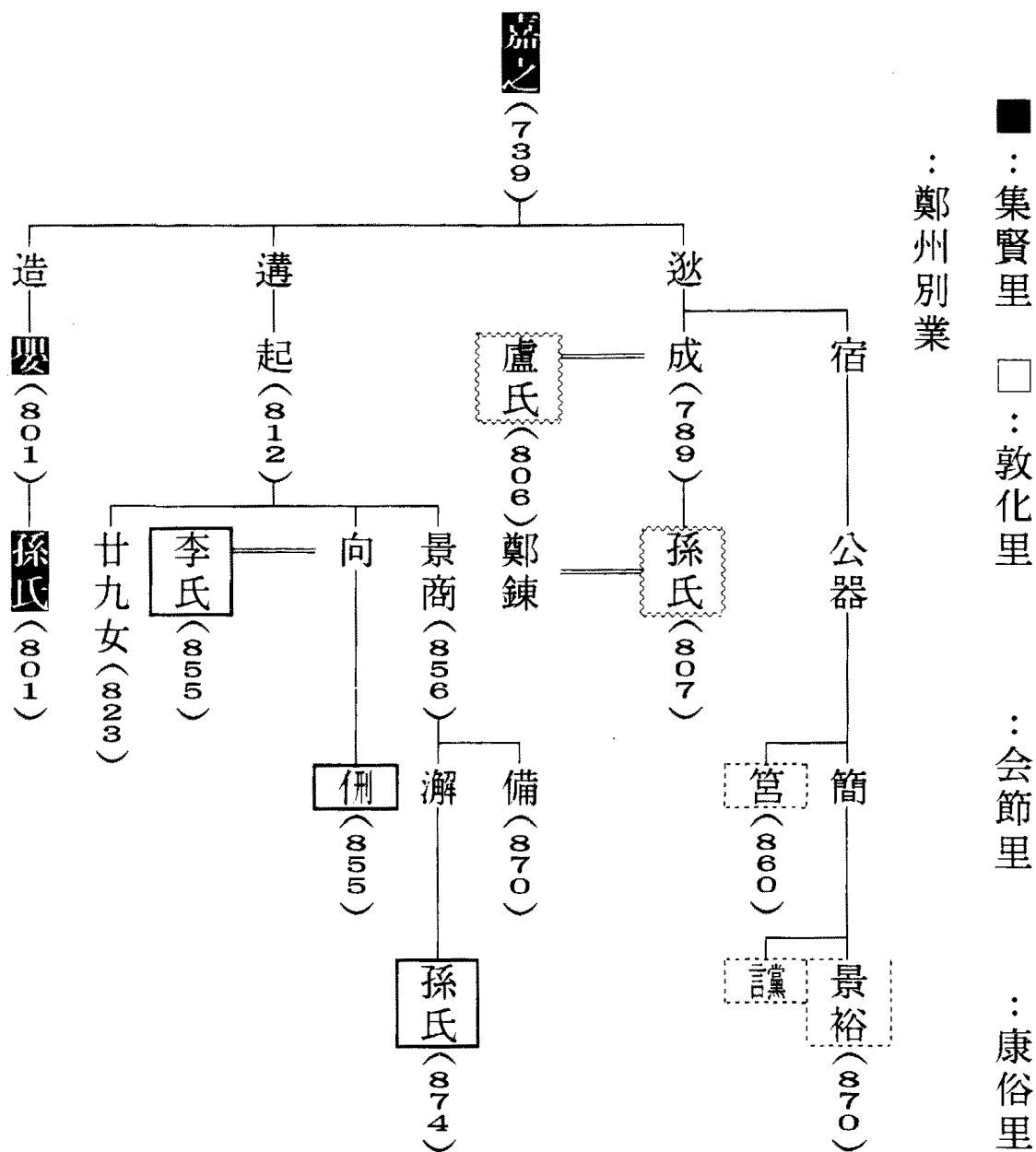
ほかに、孫逖の長男、孫宿の子孫公器の子孫は洛陽の会節里に住んでいた。そのため、孫公器の子孫宮、孫宮の甥孫讜と孫景裕三人は会節里で没している。⁽⁷²⁾孫讜の享年は六〇才で、没年は不明である。孫宮の没年の八六〇年から、孫景裕の没年の八七〇年まで、一〇年を越える。孫公器から孫景裕の子供まで四世代にわたった。この間、孫讜の弟孫徽の妻韋氏は、孫徽の二番目の兄の長安の新昌里の住所で没している。⁽⁷³⁾

孫嘉之の次男孫通系についてみると、孫の孫公父は八五一年に洛陽の陶化里で死に、⁽⁷⁴⁾孫公父の甥孫嗣初の妻韋氏は八五九年に洛陽の履信里で死んだ。⁽⁷⁵⁾孫公父の孫の孫拙が「洛城税舍」で死ぬが、このときはすでに五代の後唐であった。⁽⁷⁶⁾

孫氏家族の居住傾向を見ると、殆ど洛陽に住んでいたが、それぞれ集賢里、康俗里、敦化里、会節里に分かれていた。孫氏の事例からみると、一般に貴族階層の同居形態は三代代あるいは四世代に止まることがわかる。子孫の人数が増加し、一方、尊属も亡くなると、別居する可能性が高くなるのである。（図7参照）

次は上谷寇氏思遠系の場合である。寇釗と寇鐔とは従兄弟同士で、同じ洛陽の審教里で没した。⁽⁷⁷⁾これによって、この家

図7、樂安孫氏嘉之系の同居形態



族が審教里に住むのは祖父の寇思遠から始まり、寇鑄まで三世代にわたったと推定できる。また、寇思遠の曾孫寇章の妻鄭氏の墓誌に、寇章と二人の娘は八三三年に潭州で没した鄭氏の柩を洛陽の家族墓に帰葬して、「明年十二月、東都審教里に達す」という⁽⁷⁸⁾。寇章の墓誌の執筆者崔耿は、自分は寇氏家族の知人で、「俱に金谷の側に家し、居は審教・毓徳の南北里に臨み、情を交えること甚だ歡たり」とあるように⁽⁷⁹⁾、審教里の邸宅は寇章のときまだ残っていたと見られる。崔耿の毓徳里の家は清河崔氏大房元彦系のところにすでに述べた。つまり、寇釗の没年の七二三年から寇章の没年の八四九年まで一二年間、寇章の子供を含め、寇氏家族が審教里に住むことは五世代にわたった。この間、寇鑄の兄弟寇鈞は二三才

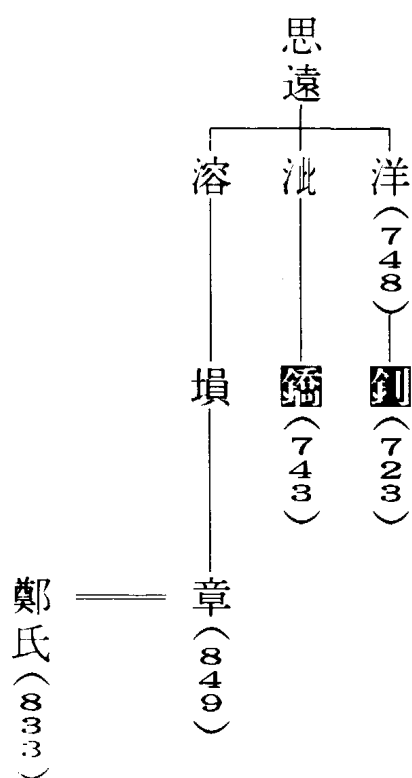
の若さで七二三年に長安の延康里に没し、もう一人の兄弟工部郎寇錫は七十七年に長安の永寧里で没したという情報が得られる。⁽⁸⁰⁾ (図8参照)

最後は瑯琊支氏光系の場合である。この家族が洛陽に居住したのは鴻臚卿の支疎から始まると考えられる。この家族の墓誌から見ると、支疎の祖父と両親は嘉興県に葬られて、継母と兄弟数人は江都邑に葬られた。⁽⁸¹⁾ 支疎の前に支氏家族はずっと江南に住んでいたと見られる。支疎の子支訢の妻鄭氏と支訢の兄支訥は洛陽の行脩里で死んでいる。⁽⁸²⁾ 鄭氏の没年の八七一年から支訥の没年の八七八年まで、七年しかないが、支疎から始まり、支訥の子供まで、三世代にわたって行脩里に居住したことになる。しかし、支疎の娘支子璋は八五三年に洛陽の永泰里で没し、まもなく、支疎も死んでいる。⁽⁸³⁾ 行脩里の邸宅は恐らく支疎が死んだ後、支訥兄弟が買い取ったのであろう。

以上述べたことをまとめると、同居形態が六世代にわたった例は崔隱甫家族で、五世代の例は盧政家族と寇思遠家族である。

図8、上谷寇氏思遠系の同居形態

■：審教里



ある。四世代の例は四例あって、崔沔家族、盧承業家族、孫起家族と孫公器家族である。三世代の例は四例あって、崔俊家族、崔渙家族、崔思約家族と孫嘉之家族である。二世代の例は崔杞家族、孫成家族と支疎家族がある(以上表二)。兄弟同居家族は貴族階層の家族形態に遍在する。従兄弟同居家族も多く見られるが、再従兄弟同居家族は珍しいと思われる。

三、居住形態から見た上流階層の家族形態

ヴォルフラム・エーベルハルト氏は中世貴族の家の特徴を田

舎と都に二つ家があることに求め、田舎の家は都の家に経済的援助を与え、都の家族は政治界で活動していて、政權の交替が同時に両方に影響を与えることは少ないと論じる⁽⁸⁴⁾。毛漢光氏は北方の貴族は殆どエーベルハルト氏のいう双家形態家族に属すると解し、さらに、唐代の貴族は北朝時代の「城郷双家形態」から「兩京双家形態」に転じたことを指摘した⁽⁸⁵⁾。唐代の貴族、特に河北地方の大貴族は、毛漢光氏の指摘のように、殆ど兩京に住んで、郊外に家族墓を営んでいた。それは唐代貴族の中央化を示す⁽⁸⁶⁾。唐代貴族の居住形態を検証するため、次に本稿で扱った一三家族の居住形態について、官舎と借家、仮住まいを除く、墓誌と各史料に現れる自宅の所在を表三として示す。

この表には、唐代貴族の「兩京双家形態」がはっきり表れている。兩京の邸宅以外にも、各家族は地方、特に兩京の郊外に別荘を営んでいた。別荘は、家族のうち仕官しない人あるいは退官した人が営む傾向が見られる。たとえば、盧仲容（范陽盧氏北祖陽烏大房思道系）の場合、彼は最初に溱州參軍に就任し、それが性に合わず、袁州鄒県尉に転じたが、それでも優れた成績を残せなかった。仕官生活がうまくいかず、莊園生活への転向を決心している⁽⁹¹⁾。孫起（樂安孫氏嘉之系）の場合は、白馬県令の任期が終わった後、死ぬまで鄭州の別荘に住んだ⁽⁹²⁾。二人とも、退官した官僚が莊園を営む例である。なお、女性が莊園を営む例も見られる。清河崔氏小房志道系には寡婦が莊園を営む傾向が見られる。崔樞の妻盧氏の墓誌に、

夫人未亡之感を銜み、幼稚を携挈し、鄭の別邑に卜居す。攻苦食淡、以て家業を成す。僮僕に勸むるに芸植を以てし、子弟を訓うるに詩礼を以てす。劬勞儉尅、僅かに三十載なり⁽⁹³⁾。

（夫人銜未亡之感、携挈幼稚、卜居于鄭之別邑。攻苦食淡、以成家業。勸僮僕以芸植、訓子弟以詩礼。劬勞儉尅、僅三十載。）

というように、盧氏は夫が亡くなった後、鄭州の莊園に約三〇年住んでいた。崔桴の妻盧氏も崔樞の妻盧氏と類似の状況にあった。盧氏の墓誌に、

表二

家族代表名	出身家族家系	邸宅所在地	同居世代 推定	最低同居 年数
崔隱甫家族	清河崔氏大房	洛陽毓德里	六世代	八一年
盧政家族	范陽盧氏北祖 第二房	洛陽康俗里	五世代	八五年
寇思遠家族	上谷寇氏	洛陽審教里	五世代	一二六年
崔沔家族	博陵崔氏第二 房	洛陽崇政里	四世代	七三年
盧承業家族	范陽盧氏北祖 陽烏大房	洛陽德懋里	四世代	七三年
孫起家族	樂安孫氏	洛陽敦化里	四世代	一九年
孫公器家族	樂安孫氏	洛陽会節里	四世代	一〇年
崔俊家族	博陵崔氏第二 房	洛陽時邕里	三世代	四七年
崔渙家族	清河崔氏大房	洛陽教業里	三世代	一五年
崔思約家族	清河崔氏鄭州 房	洛陽毓德里	三世代	一九年
孫嘉之家族	樂安孫氏	洛陽集賢里	三世代	六二年
崔杞家族	清河崔氏南祖	洛陽利仁里 (官舎)	二世代	二年
孫成家族	樂安孫氏	洛陽康俗里	二世代	二年
支疎家族	瑯琊支氏	洛陽行脩里	二世代	七年

表三

家族	博陵	崔氏	第二	房儼	系	清河	崔氏	南祖	融系	清河	崔氏	大房	元彦	系	清河	崔氏	小房	志道
邸宅或いは不動産所在地	長安	洛陽	履道里第	崇政里第	時邕里第 敦行里第	ほか	長安	洛陽	敦行里第 履道里第	ほか	長安	毓德里第	教業里第 殖業里第	立行里第	伊川別業（河南府）	靖恭里第 新昌里第 長興里第	懷仁里第	洛陽
出典	崔祐甫誌	崔暲誌	崔暲妻王媛誌、盧招誌、崔沔妻王方大誌、崔衆甫妻李金誌、顏真卿「崔沔陋室銘」（『顏魯公文集』卷一四）	崔倭誌、李潘妻崔氏誌 崔紆誌	崔夷甫誌 崔衆甫誌	『唐兩京城坊考』卷三崔融旧第 崔巖誌	『唐兩京城坊考』卷五崔融宅 崔慎經妻李平誌 崔慎由誌	崔從妻李春誌	崔微妻盧氏誌、崔泳誌、崔千里誌、崔行規妻鄭娟誌、崔行規誌 崔洧誌、崔芑誌	崔揆母林氏誌、崔洧側室張紫虛誌 ⁸⁷	崔揆側室樊氏誌	崔千里誌	『唐兩京城坊考』卷三崔彦昭宅 『唐語林』卷4崔羣宅 盧緘妻崔氏誌	崔湛妻王京誌				

房文 構系		樂安 孫氏 嘉之 系		范陽 張氏 次惠 系		昌黎 慕容 氏紹	
康俗里第	ほか	長安	洛陽	長安	洛陽	長安	長安
河南府濟源縣私室	親仁里第	新昌里第	集賢里第	河陽別業(河南府)	宣陽里第	長興里第	親仁里第
澧州東郭別墅	永樂里第	章善里第	會節里第	鄭州別業	長興里第	長興里第	長興里第
荊州私第	敦化里第	陶化里第	履信里第	河中府私第	親仁里第	親仁里第	親仁里第
蘇州嘉興縣札賢鄉	孫起妻裴氏誌	孫徽妻韋氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	襄(陽)私第(襄州)	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
學秀里第	孫備妻于氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌	孫訓誌、孫向妻李氏誌、孫澥女誌	孫幼実誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫起妻裴氏誌	孫嘉之誌、孫嬰誌、孫嬰女誌	孫視誌	孫起誌、孫起女廿九女誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫徽妻韋氏誌	孫成妻盧氏誌、鄭鍊妻孫氏誌	孫公乂誌	孫綯誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌	慕容知敬誌
	孫備妻于氏誌	孫公乂誌					

系		清河	崔氏	鄭州	房幼	系	范陽	盧氏	北祖	陽烏	大房	思道	系	范陽	盧氏	北祖	盧氏	第二
		長安	洛陽	洛陽	洛陽	長安	長安	洛陽	洛陽	洛陽	洛陽	洛陽	洛陽	長安	洛陽	洛陽	洛陽	洛陽
道光里第		親仁里第	道政里第	通遠里第	毓德里第	宣教里第	擇善里第	見当たらない	德懋里第	隆化里第	婦德里第	道光里第	永泰里第	譙郡鹿邑県私舎(亳州)	臨漳県別舎(相州)	緱氏県別荘(河南府)	長興里第	靖安里第
履道里第		渾池県第(河南府)	荊門別業(荊州)	新鄭別墅(鄭州)	平陰旧墅(濟州)												宣平里第	温柔里第
崔樅誌		崔棼妻盧氏誌	鄭高妻崔氏誌 ⁸⁸	崔樅誌、崔樅妻盧氏誌、崔翬誌	崔棼妻盧氏誌 ⁸⁹	崔善福誌	崔韶誌	崔玄籍誌	崔哲誌、崔同穎誌	崔傑誌	崔誕誌	盧承業妻李淮頂誌、盧全貞妻李氏誌、盧全貞誌、盧澄誌、盧全嗣女誌	盧調誌	盧行毅妻辛氏誌	盧寂誌	盧子鷺誌	盧復誌	盧全貞誌
隣詩「崔羣宅」(『白氏長慶集』卷二六)		崔詹誌															盧仲容誌	盧知宗妻鄭子章誌
																	盧踐言誌	盧當誌
																	盧翊妻房鹿娘誌	

懷州（崔稭）の即世に及び未だ喪を終わらざるに、一男子の曰く鎮、纔に五にして夭す。三女子皆稚齒たり。丘園に嫠処し、饘粥是れ乏し。雅に釈氏に達し、窮酷に当たるも尤怨無し。傭僕を課勵し、田業に盡力す。姻戚時に助け、農桑稍や収む。遇に委ねて恬然、殆ど愠喜を絶つ。ああ其れ至徳なるかな。⁽⁹⁴⁾

（及懷州即世、未終喪、一男子曰鎮、纔五而夭。三女子皆稚齒。嫠處丘園、饘粥是乏。雅達釈氏、當窮酷而無尤怨。課勵傭僕、盡力田業。姻戚時助、農桑稍収、委遇恬然、殆絶愠喜、嗟呼其至

宗系	洛陽	履信里第
上谷	長安	延康里第
寇氏		永寧里第
思遠	洛陽	審教里第
系		
ほか	河陽別(業)(河南府)	
瑯琊	長安	見当たらない
支氏	洛陽	永泰里第
光系	行脩里第	
	旧里進思第(蘇州嘉興 県)	
安定	長安	宣陽里第
張氏		新昌里第
處節		静恭里第
系	洛陽	見当たらない
	ほか	
張勤女嬰誌	張翔志	張士階女嫺誌
張翊志	張士階女婉誌	張士階女嬋誌
孟州河陰県別墅	荊州精舍	孟州河陰県別墅

徳哉。)

というように、夫の崔曄が亡くなった後、盧氏は幼い子供を連れて平陰にある莊園に移住した。莊園で辛勞を重ねた二人の姿は印象深い。なお、崔羣の姉も夫の鄭高が亡くなった後、荆門の別業に移住した⁽⁹⁵⁾。別莊のほか、任官地に自宅を置いた傾向も見られるが、仮住まいという感がある。

ただし、「両京双家形態」といっても洛陽が本宅と見なされた傾向が窺われる。表一で没所が同じ事例を挙げたが、そこに現れたのは殆ど洛陽の事例であって、長安で死んだ者はいるけれども、同一所で死んだ例はない。これは長安より洛陽の居住形態が安定的であった証拠である。例えば白居易の場合、妹尾達彦氏の研究によると、中央官に就任してから、約三三年両京に住んでいたが、前半期の一五年は長安に過ごし、後半期の一八年は洛陽で暮らした。長安にいたときには、住所が不安定で、時々引越したが、洛陽の履道里の私宅には一八年間住んでいた⁽⁹⁶⁾。洛陽は江淮の漕米を長安へ運ぶ中継所で、食料不足の場合、皇帝は官僚たちを連れて洛陽へ行くしかなかった。これが唐代の殆どの官僚が長安と洛陽に家を持っていた主な理由である。政治的にも両京制度が高宗顯慶二年から始まっており、特に武周政権は洛陽を首都としたため、洛陽の政治的地位が上昇した。もともと、玄宗の開元年間に漕運問題が解決した後は、皇帝は二度と洛陽へ行かず、洛陽は政治・経済面での優位性を失って行く。それでも洛陽が安定的な居住の地であったのは、洛陽が文人たちの憧れの都市であったからである。政治・経済的優位は失ったが、その文化的雰囲気が好まれ文人たちがここに集ったのである⁽⁹⁷⁾。范陽盧氏第二房文構系を例にとると、長安で亡くなった盧景脩、盧踐言、盧當三人は、それぞれ科挙落第生、京兆府涇陽県尉と国子助教である⁽⁹⁸⁾。これは長安に住む上流階層が中央と京兆府の官僚と科挙受験生によって構成されていることを反映している。長安にあっては身分の変更にしたがって、例えば昇進あるいは科挙合格によって、住所が変わることがよく見られる。妹尾達彦氏によると、白居易は五品官になって始めて長安の新昌里の私宅を購入した。その前中下級官僚としての生活では、ずっと借家に住んで、官品、身分の変動によって、頻繁に転居し、同じ住所に住んだのは平均二年未満であ

った。競争の激しい長安とは反対に、唐代後期の洛陽は前半期の政治、経済的優位を失ったので、退官した官僚の老後生活と失脚した政治家の臨時避難地になった。⁽⁹⁹⁾これも唐代後期に洛陽の居住形態が安定的であった理由である。

しかし、すべての家族の居住形態が安定的であったというわけではない。唐の後期、各節度使は辟召権を握り、自由に幕僚を選べた。これは知識人に新たな進路を開くことになる。幕職官の経歴も昇進コースの重要な一部分である。⁽¹⁰⁰⁾安定張氏処節系の墓誌を見てみよう。張翽、張翽兄弟と張翽の子張士陵、張士階兄弟は諸使職の幕僚になった経歴がある。彼らは家族を連れて地方に赴任した。張翽と妻鄭氏の合葬墓誌に、

永泰中、姑受終の時、夫人遠くにあり。姑すなわち一箱の衣を出して侍者に謂ひて曰く、長新婦至らば之を与え、吾が平生に其の純孝を知るを表せ、と。⁽¹⁰¹⁾

(永泰中、姑受終時、夫人在遠。姑乃出一箱衣謂侍者曰、長新婦至与之、表吾平生知其純孝也。)

というように、張翽の母親が亡くなる前に、鄭氏は夫とともに任官地にいた。張翽の妻源氏は次男張士陵の江西觀察使路實の僚佐の任期中に洪州で亡くなった。⁽¹⁰²⁾長期に地方にいた僚佐たちが両京に安定した住居を持つことは難しいであろう。例えば、張士階一家の場合、娘の張婉は長安の新昌里で生まれ、三才のとき父親の勤務先の変更とともに夏口(武漢)に移り、二〇才のとき父親の湖州刺史の任期中に呉興の官舎で亡くなった。⁽¹⁰³⁾張婉の妹張嬋の場合は潞州に生まれ、二五才のとき長安恭安里で亡くなった。⁽¹⁰⁴⁾このように張士階一家の住居は不安定である。任官地の変更によって、あちこちに転居する官僚とその家族は地方官の家族の典型の一つといえよう。

他方、昌黎慕容氏紹宗系の墓誌から、兄弟別居の事実が明らかになる。慕容知敬は六六八年に長安の宣陽里で、慕容知敬の弟慕容知晦の妻費婉は六七六年に長安の長興里で亡くなった。⁽¹⁰⁵⁾費婉の子慕容瑾は七三二年に洛陽の擇善里で、もう一人の息子の慕容珣は七三六年に洛陽の殖業里で亡くなった。⁽¹⁰⁶⁾慕容珣の妻崔氏は七二四年に長安の親仁里で、娘の慕容神護師は七五一年に洛陽の恭安里で亡くなった。⁽¹⁰⁷⁾父母の生存中の別居かどうかかわからないが、没所の記載から、同居していな

かったことは断定できる。

唐代の貴族は殆ど「兩京双家形態」であるにしても、本籍と強い繋がりを持つ家族も存在していた。張柬之（范陽張氏次惠系）列伝には襄州襄陽出身といい、張氏家族の墓誌には范陽方城の人とある。つまり、この家族の本籍は襄州襄陽で、郡望は范陽方城である。ほかの官僚とは違って、張柬之は家族墓を兩京に移さず、ずっと襄州に置いていて、張柬之は神龍年間に失脚した後、故郷の襄州に帰った。その時伴って帰った息子の張漪は傲慢な態度で地元の人に接したので、当時の人に批判されたとい⁽¹⁰⁸⁾い、嗣曹王李皋が襄州刺史に就任したとき、張柬之の莊園を買収しようとしたが、幕僚の馬彞の反対で、断念している⁽¹⁰⁹⁾。貞元年間にこの莊園はまだ存在し、張氏一族がまだ襄州に勢力を残していたことが、ここからわかる。ただし、その張氏にしても長安と洛陽の兩京に家をもっている。張漪の子張軫が七三二年に洛陽の陶化里で亡くなり、張漪の妻李氏が同年に長安の靖安里で亡くなっているのである⁽¹¹⁰⁾。張氏家族はエーベルハルト氏のいう「双家形態」の家族に相当するのではないだろうか。

おわりに

本稿で分析してきたように、唐代の貴族階層には兄弟同居という家族形態がよく見られる。つまり、三族制家族——父母・妻子・兄弟の同居は一般に貴族階層に遍在している。しかし、同時期にそれら家族がそろって同一の家に居住しているわけでは必ずしもない。毛漢光氏は墓誌に基づいて、唐代人の平均寿命は男性が五八・二才で、女性が五五・七才であるという統計結果を出している⁽¹¹⁾。唐代人の平均寿命がだいたい六〇才以下であるのであれば、三族が常に家族の中に存在するとは限らない。孫が生まれる前に、祖父母は亡くなっている場合もある。また、子供が大人になる前に、親の一人あるいは両方ともに亡くなっている可能性もある。なお、地方へ赴任する官僚の場合、家族も一緒に同行したので、兩京の本

宅からしばらく離れて、地方の官舎に仮住まいをしていた。家族が同時期に両京の本宅に同居している期間はわずか何年かという可能性もあるであろう。

唐の五品以上官僚の場合、免税の特権がある。もし家族員の一人が高官の場合、その人を中心に親族が集って同居するのは珍しいことではない。これが高級官僚の家族が大家族であることが多い理由であろう。免税の特権により、上流階層にとっては同居する方が有利であった。上流階層に同居家族が盛んであるのは風習だけではなく、税制とも関係あると考えられる。

注

本稿で引用された墓誌の載る所在墓誌集は下記の記号に代表される。

A 『隋唐五代墓誌彙編』（天津古籍出版社、一九九一～一九九二、全三〇冊）

B 『唐代墓誌彙編』（周紹良主編、上海古籍出版社、一九九二、全一冊）

C 『洛陽新獲墓誌』（洛陽市第二文物工作隊主編、文物出版社、一九九六、全一冊）

(1) 中国古代家族形態の研究については、守屋美都雄「漢代の家族——その学説史的展望」（『中国古代の家族と国家』、東洋史研究会、一九六八）、堀敏一「中国古代の家族形態」（『中国古代の家と集落』、汲古書院、一九九六）、佐竹靖彦「宋代の家族と宗族——宋代の家族と社会に関する研究の進展のために」（『人文学報』二五七、一九九五）など参照。

(2) 池田温『中国古代籍帳研究』、東京大学東洋文化研究所、一九七九。

(3) 例えば、毛漢光『中国中古社会史論』（聯経出版事業公司、一九八八）など。

(4) 『旧唐書』卷一一九・一八八、『新唐書』卷一二九・一四二の崔沔伝、崔祐甫伝参照。なお、博陵崔氏については、

P.B. Ebrey “The Aristocratic Families of Early Imperial China: A Study of the Po-Ling Tsui Family”, (“Cambridge Studies in Chinese History, Literature, and Institution”, Cambridge Univ. Pr., Cambridge, 一九七八）参照。

(5) 『旧唐書』卷九四・一七七、『新唐書』卷一一四の崔融伝、崔慎由伝参照。

(6) 『旧唐書』卷一八五下、『新唐書』卷一二九の崔隱甫伝参照。

(7) 『旧唐書』卷一五九・一七八、『新唐書』卷一六五・一八三の崔羣伝、崔彦昭伝参照。

(8) 『旧唐書』卷九〇、『新唐書』卷一一四の崔元綜伝参照。

(9) 『旧唐書』卷八一・九四、『新唐書』卷一〇六・一二三の盧承慶伝、盧藏用伝参照。なお、范陽盧氏については、愛宕元「唐代范陽盧氏研究——婚姻關係を中心に」（川勝義雄・砺波護編『中国貴族制社会の研究』、京都大学人文科学研究所、一九八七）参照。

(10) 『旧唐書』卷一七六、『新唐書』卷一一八の盧商伝及び愛宕元、前引用文参照。

(11) 『旧唐書』卷九一、『新唐書』卷一二〇の張柬之伝参照。

(12) 『旧唐書』卷一九〇中、『新唐書』卷一八三・一九三・二〇二の孫逖伝、孫偓伝、孫揆伝参照。なお、樂安孫氏については、高橋徹「唐代樂安孫氏」（『学習院史学』29、一九九一）参照。

(13) 『北齊書』卷二〇、『隋書』卷六五の慕容紹宗伝、慕容

墓誌年代	墓誌主	埋葬地	家系別
聖曆2(699) 1 28	崔善福	洛州合宮縣金谷鄉昭覺原	善福系
聖曆2(699) 1 28	崔玄籍と妻 屈突氏	洛州合宮縣之昭覺原	善福系
聖曆2(699) 1 28	崔玄籍妻李氏	洛州合宮縣金谷鄉昭覺原	善福系
聖曆2(699) 1 28	崔詔	洛州合宮縣金谷鄉昭覺原	善福系
聖曆2(699) 1 28	崔歆	洛州合宮縣之昭覺原	善福系
久視1(700) 10 28	崔哲	洛陽城北邨山	思約系
開元3(715) 10 22	崔哲妻源氏	洛陽城北邨	思約系
開元7(719) 閏7 5	崔同類	河南府平樂原	思約系
開元18(730) 1 21	崔羨	河南府河南縣河陰之界	思約系

表四

墓誌年代	墓誌主	埋葬地	家系別
仁壽1(601) 2 19	盧文構	住公山之陽	家系別
仁壽1(601) 2 19	盧文機	涿郡西北住公山之陽	家系別
武德8(625) 12 25	盧文構妻李月相	幽州范陽縣永福鄉	家系別
開元21(733) 10 16	盧翊	河南府邨山之南原	家系別
開元27(739) 8 12	盧翊妻房鹿娘	河南府邨山之南原	家系別
元和7(812) 8 16	盧瑤妻崔元二	東都邨山北原	政系
長慶3(823) 10 22	盧直	邨山北原	政系
寶曆2(828) 11 9	盧伯卿妻崔氏	河南府金谷鄉焦古村	晏系
大和3(829) 10 26	盧昂と妻房氏	河南府金谷鄉焦古村	晏系
大和3(829) 10 26	盧初	河南府洛陽縣平陰鄉南陶村	政系
大和4(830) 2 28	盧方	河南府洛陽縣平陰鄉南陶村	政系
大和5(831) 11 8	盧景脩	邨山陶村東原	政系
大和6(832) 1 26	盧直妻崔氏	洛陽縣平陰鄉陶村南原	晏系
開成5(840) 11 30	盧伯卿	河南府洛陽縣平陰鄉陶村	政系
大中1(847) 閏3 7	盧踐言	河南府洛陽縣平陰鄉陶村	政系
大中8(854) 2 29	盧知宗妻鄭子章	河南府洛陽縣平陰鄉	晏系
大中9(855) 2 11	盧當	河南府洛陽縣平陰鄉	政系
咸通2(861) 3 28	盧宏と妻崔氏	洛陽縣平□鄉	政系
咸通15(874) 4 21	盧知宗	河南府金谷鄉焦古村	晏系

表五

墓誌年代	墓誌主	埋葬地	家系別
大業9(613) 3 10	張盈	河南府北邨山	綰系
大業9(613) 3 10	張盈妻蕭饒性	河南府河南縣之北邨山	綰系
大業10(614) 11 15	張軻	河南府河南縣之靈淵里	綰系
天授3(692) 1 6	張玄弼と妻丘氏	安養縣西相城里之平原	綰系
天授3(692) 1 6	張景之	安養縣西相城里	綰系
天授3(692) 1 6	張慶之と妻杜氏	安養縣西相城里	綰系
天授3(692) 1 6	張敬之	安養縣西相城里	綰系
開元21(733) 10 26	張點	安養縣西相城里	綰系
開元21(733) 10 26	張滂と妻李氏	相城旧塋	綰系
開元21(733) 10 26	張軫	安養縣相城里	綰系
開元21(733) 10 26	張軫と妻邵氏	安養縣相城里	綰系
天寶6(747) 10 12	張軫と妻李氏	臨漢縣(旧名安養縣)平原	綰系
天寶12(753) 8 26	張肫と妻李氏	臨漢縣(旧名安養縣)平原	綰系

表六

墓誌年代	墓誌主	埋葬地	家系別
739 ~ 855	孫嘉之と妻宋氏、孫成、孫起、孫起妻裴氏、孫廿九女、孫側	平陰鄉	家系別
850 ~ 880	孫仕竭妻張氏、孫公义、孫徽妻韋氏、孫嗣初妻韋氏、孫備妻于氏、孫方紹、孫備、孫景裕、孫理、孫理妻李氏、孫綯、孫持一、孫幼夷	平樂鄉	家系別
866 ~ 874	孫景商、孫筍、孫嗣初、孫虬妻裴氏	杜郭村	家系別

表七

三藏伝参照。

(14) 「寇章誌」(A洛陽14-17、B大中031)。

(15) 『元和姓纂』卷二支氏。

(16) 「支光誌」(A洛陽14-60、B大中109)、「支成誌」(A洛陽14-59、B大中110)、「支叔向誌」(B大中111) 参照。

(17) 「張齊丘誌」(A洛陽9-8、B開元052)、「張士陵誌」(A洛陽13-33、B元和104) 参照。安定張氏については、『晋書』卷八五張軌伝、『魏書』卷九九張寔伝、陳弱水「從唐暄看唐代士族生活与心態的幾個方面」(『新史学』10-2、一九九九) など参照。

(18) 清河崔氏鄭州房幼系の墓誌に記される埋葬地は表四を参照のこと。

(19) 范陽盧氏北祖第二房文構系の墓誌に記される埋葬地は表五を参照のこと。

(20) 「崔暄誌」(A洛陽12-72、B大曆062) 参照。

(21) 范陽張氏次惠系の墓誌に記される埋葬地は表六を参照のこと。

(22) 范陽張氏のほかに、滎陽鄭氏も本籍地に帰葬する習慣を持っていた。愛宕元「唐代滎陽鄭氏研究——本貫地帰葬を中心に」(『人文』35、一九八九) 参照。

(23) 樂安孫氏嘉之系の埋葬地の時期区分は表七を参照のこと。

(24) 唐代士大夫階層の帰葬における觀念については、中砂明德「唐代の墓葬と墓誌」(礪波護編『中国中世の文物』、

明文舎、一九九三) 参照。

(25) 「孫瑄誌」(A洛陽14-155)、「孫瑄妻李氏誌」(A洛陽14-68、B大中125)、「孫泳誌」(A洛陽14-154、B咸通099) 参照。

「孫瑄妻李氏誌」の年代について、郭玉棠氏の『千唐誌齋藏石目錄』は大中10年12月と記したが、閻金安氏が指摘したように、大中10年12月ではなく、咸通12年12月の方が正しい。閻金安「孫瑄墓誌介紹」(『文物』一九九五一二) 参照。

(26) 「支氏妻崔氏誌」(A洛陽14-104、B咸通019)。

(27) 「支志堅誌」(A洛陽14-105、B咸通020)。

(28) 「李慈誌」(A洛陽8-68、B神龍021)、「沈浩豐誌」(A洛陽10-206、B開元536)。

(29) 「崔衆甫妻李金誌」(A洛陽12-136、B貞元062)。

(30) 松崎つね子「睡虎地秦簡よりみた秦の家族と国家」(中国古代史研究会編『中国古代史研究』5、雄山閣出版、一九八二)、太田幸男「睡虎地秦墓竹簡にみえる『室』・『戸』・『同居』をめぐる」(西嶋定生博士還暦記念『東アジア史における国家と農民』、山川出版社、一九八四)、堀敏一「中国古代の家と戸」(前掲書) など参照。

(31) 「崔茂藻誌」(A洛陽14-174、B乾符004)。

(32) 「鄭氏妻崔琪誌」(A洛陽14-95、B咸通005)。

(33) 「崔暄誌」(同注20)、「崔渾妻盧梵兒誌」(A洛陽12-71、B大曆058) 参照。

(34) 『全唐文』卷三三八、『顏魯公文集』卷一四。

(35) 「崔暄妻王媛誌」(A洛陽12-74、B大曆063)、「崔沔妻王

- 方大誌」(A洛陽12-66、B大曆061)、「盧招誌」(A北京1-198、B天宝252)、「崔衆甫妻李金誌」(同注29)。
- (36) 「鄭賓妻崔攀誌」(A洛陽10-165、B開元492)、「崔沔誌」(A洛陽12-67、B大曆060)。
- (37) 同注34。
- (38) 「崔祐甫誌」(A洛陽12-91、B建中004)。
- (39) 「崔俊誌」(『全唐文』卷六五四元「有唐贈太子少保崔公墓誌銘」)、「李潘妻崔氏誌」(A洛陽14-148、B咸通087)。
- (40) 『旧唐書』卷一九、「新唐書」卷一四二崔祐甫伝参照。
- (41) 「崔紆誌」(A洛陽14-160、B咸通104)。
- (42) 「崔杞妻李珩誌」(A洛陽15-124)、「崔崇素誌」(A洛陽15-125)。
- (43) 「崔微妻盧氏誌」(『全唐文』卷七八五穆員「崔少尹夫人盧氏墓誌銘」)、「崔泳誌」(『全唐文』卷七八五穆員「陸渾尉崔君墓誌銘」)、「崔千里誌」(A洛陽12-182、B貞元125)、「崔行規誌」(A洛陽14-137、B咸通071)、「崔行規妻鄭娟誌」(A洛陽14-119、B咸通044)。
- (44) 同注14。
- (45) 「崔洧誌」(A洛陽11-140、B開成001)、「崔芑誌」(A洛陽14-31、B大中063)。
- (46) 「崔揆母林氏誌」(A洛陽13-165、B開成044)、「崔洧側室張紫虛誌」(A洛陽14-163、B咸通107)。
- (47) 「崔程誌」(A洛陽12-153、B貞元096)、「崔檣妻王氏誌」(高橋継男「洛陽出土唐代墓誌四方の紹介と若干の考察」、『東洋大学文学部紀要』52-24、一九九九参照)。
- (48) 高橋継男氏もそのことに言及している。注47所掲論文参照。
- (49) 温玉成「洛陽大福先寺考察」(『洛陽考古40年——一九九二年洛陽考古學術研究会論文集』、科学出版社、一九九六)参照。
- (50) 「崔哲誌」(A洛陽7-189、B久視015)、「崔同穎誌」(B開元087)。
- (51) 「崔傑誌」(A洛陽11-152、B天宝178)。
- (52) 「盧承業妻李灌頂誌」(A洛陽6-109、B光宅006)、「盧全貞妻李氏誌」(A洛陽11-1、C55)、「盧燈誌」(A洛陽11-164、B天宝194)、「盧全嗣女誌」(A洛陽12-13、B聖武002)。
- (53) 「盧調誌」(A洛陽8-202、B開元028)。
- (54) 「盧行毅妻辛氏誌」(A洛陽9-194、B開元281)。
- (55) 「盧玢誌」(A洛陽8-154、B景雲014)。
- (56) 「盧直誌」(A洛陽13-60、B長慶023)、「盧直妻崔氏誌」(A洛陽13-114、B大和046)、「盧方誌」(A洛陽13-104)、「盧樂娘誌」(A洛陽14-185、B乾符022)。
- (57) 『太平広記』卷八六三「盧瑗」。
- (58) 「盧景修誌」(A洛陽13-114、B大和044)。
- (59) 「盧踐言誌」(A洛陽14-3、B大中003)。
- (60) 「盧當誌」(A洛陽14-45、B大中088)。
- (61) 「孫嘉之誌」(『全唐文』卷三二三孫逖「宋州司馬先府君墓誌銘」)。

- (62) 「孫嬰誌」(A洛陽12-170、B貞元113)、「孫嬰女誌」(A洛陽12-171、B貞元114)。
- (63) 「孫成妻盧氏誌」(A洛陽12-194、B永貞006)、「鄭鍊妻孫氏誌」(A洛陽12-202、B元和015)。
- (64) 「孫成妻盧氏誌」(同前注)。
- (65) 「孫成誌」(A洛陽12-112、B貞元026) 参照。
- (66) 「孫視誌」(A洛陽12-24、B顯聖002)。
- (67) 「孫起誌」(B元和058)、「孫廿九女誌」(A洛陽14-33、B大中065)。
- (68) 「孫側誌」(A洛陽14-48、B大中092)、「孫向妻李氏誌」(A洛陽15-6、B大中095)、「孫解女誌」(A洛陽14-169、B咸通117)。
- (69) 「孫備誌」(A洛陽13-172、B會昌004)。「孫備誌」の年代について、郭玉棠氏の『千唐誌齋藏石目錄』は會昌元(八四一)年と記すが、「孫備妻于氏誌」(A洛陽14-118、B咸通040)の年代は咸通六(八六五)年で、墓誌の執筆者である孫備が妻より早く死亡したとするのは無理であろう。「于氏誌」に、「大中七年、年十八、余冠有二歳」とあるように、二人には四才の差があることがわかる。「孫備誌」の年代は咸通一一(八七〇)年の方が正しいはずである。
- (70) 「孫起妻裴氏誌」(A洛陽13-178、B會昌011)、「孫備妻于氏誌」(同注69)。
- (71) 『太平広記』卷一三八「孫偃」。
- (72) 「孫管誌」(A洛陽14-89、B大中163)、「孫謙誌」(A洛陽15-7、B殘誌015)、「孫景裕誌」(A洛陽14-145、B咸通084)。
- (73) 「孫徽妻韋氏誌」(B大中151)。
- (74) 「孫公义誌」(A洛陽14-25、B大中054)。
- (75) 「孫嗣初妻韋氏誌」(A洛陽14-88、B大中161)。
- (76) 「孫拙誌」(A洛陽15-135)。
- (77) 「寇釗誌」(A洛陽9-110、B開元182)、「寇鑄誌」(A洛陽11-23、B天寶025)。
- (78) 「寇章妻鄭氏誌」(A洛陽13-128、B大和074)。
- (79) 同注14。
- (80) 「寇鈞誌」(A洛陽9-165、B開元250)、「寇錫誌」(A洛陽12-76、B大曆064)。
- (81) 「支光誌」(同注15)、「支成誌」(同注15)、「支叔向誌」(同注15)、「支詢誌」(A洛陽14-61、B大中112)、「支子璋誌」(A洛陽14-58、B大中113)、「支子珪誌」(A洛陽14-57、B大中114) など参照。
- (82) 「支訢妻鄭氏誌」(A洛陽14-176、B乾符009)、「支訥誌」(A洛陽14-188、B乾符033)。
- (83) 「支子璋誌」(同注80)。
- (84) Wolfram Eberhard "Social Forces in Medieval China" (Leiden, Second Edition, 1965) 参照。
- (85) 毛漢光「中古家族之變動」(注3所掲書所収) 参照。
- (86) 毛漢光「從士族籍貫遷移看唐代士族之中央化」(注3所掲書所収) 参照。
- (87) 張紫虛は次女の夫王寓の家で亡くなった可能性がある。

ことは既に本文に述べた。「崔洵側室張紫虛誌」(同注46)。

(88) この「荆門別業」は崔氏の夫族鄭氏の財産の可能性がある。「鄭高妻崔氏誌」(A洛陽12-201、C88)。

(89) この「平陰旧墅」の所在地について、愛宕元氏は「河南平陰郷」と解した。注9所掲論文参照。

(90) 「慕容氏妻張順誌」と「慕容知廉誌」、「慕容昇誌」、「慕容知晦妻費婉誌」など三点の墓誌では同日葬(聖暦二年八月九日)である点から判断すると、張順はこの家族と繋がっている可能性がある。「慕容氏妻張順誌」(A洛陽7-154、B聖暦035)。

(91) 「盧仲容誌」(A洛陽12-7、B乾元009)。

(92) 「孫起誌」(同注67)。

(93) 「崔樞妻盧氏誌」(A洛陽14-41、B大中080)。

(94) 「崔稔妻盧氏誌」(A洛陽14-102、B咸通015)。

(95) 「鄭高妻崔氏誌」(同注88)。

(96) 妹尾達彦「白居易と長安洛陽」(『白居易研究講座 第一卷 白居易の文学と人生』勉誠社、一九九三) 参照。

(97) 徐萃芳「唐代兩京的政治、經濟和文化生活」(『考古』一九八二・六)、王吉林「晚唐洛陽的分司生涯」(『晚唐的社會与文化』、学生書局、一九九〇)、程存潔「唐代東都留守考」(武漢大學歷史系魏晉南北朝隋唐史研究室編『魏晉南北朝隋唐史資料』13、一九九四)、木田知生「北宋時代の洛陽と士人達——開封との対立のなかで」(『東洋史研究』38-1、一九七九)、妹尾達彦「隋唐洛陽城の官人居住地」(『東京

大学東洋文化研究所紀要』193、一九九七)、甘懷真「唐代官人的宦遊生活——以經濟生活爲中心」(『第二屆 唐代文化研討會論文集』、中國唐代學會主編、一九九五) など参照。

(98) 同注58、59、60。

(99) 前注96所掲妹尾達彦論文参照。

(100) 唐後期における藩鎮体制の辟召制については、礪波護「唐末五代の変革と官僚制」(『唐代政治社会史研究』、同朋舎、一九八六)、愛宕元「唐代後半における社会変質の一考察」(『東方学報』42、一九七二)、渡辺孝「中晚唐期における官人の幕職入仕とその背景」(松本肇・川合康三編『中唐文学の視角』、創文社、一九九八)、松浦典弘「唐後半期の人事における幕職官の位置」(『古代文化』50-11、一九九八) など参照のこと。

(101) 「張翊誌」(A洛陽12-88、B建中001)。

(102) 「張翔妻源氏誌」(A洛陽12-143、B貞元074)。

(103) 「張婉誌」(A洛陽3-210、B顯慶079)。「張婉誌」の年代について、饒宗頤氏が指摘したように、□慶三年は顯慶三(六五八)年ではなく、長慶三(八二三)年の方が正しい。饒宗頤『唐宋墓誌・遠東学院藏拓片図録』(香港中文大學出版社、一九八一年) 番号346参照。

(104) 「張嬋誌」(A洛陽13-164、B開成041)。

(105) 「慕容知敬誌」(A洛陽5-150、B咸亨077)、「慕容知晦妻費婉誌」(A洛陽7-155、B聖暦033)。

(106) 「慕容瑾誌」(A洛陽10-44、B開元346)、「慕容珣誌」(A

洛陽10・126)。

(107) 「慕容珣誌」(同前注)、「慕容神護師誌」(A洛陽11・150、B天寶177)。

(108) 同注11。

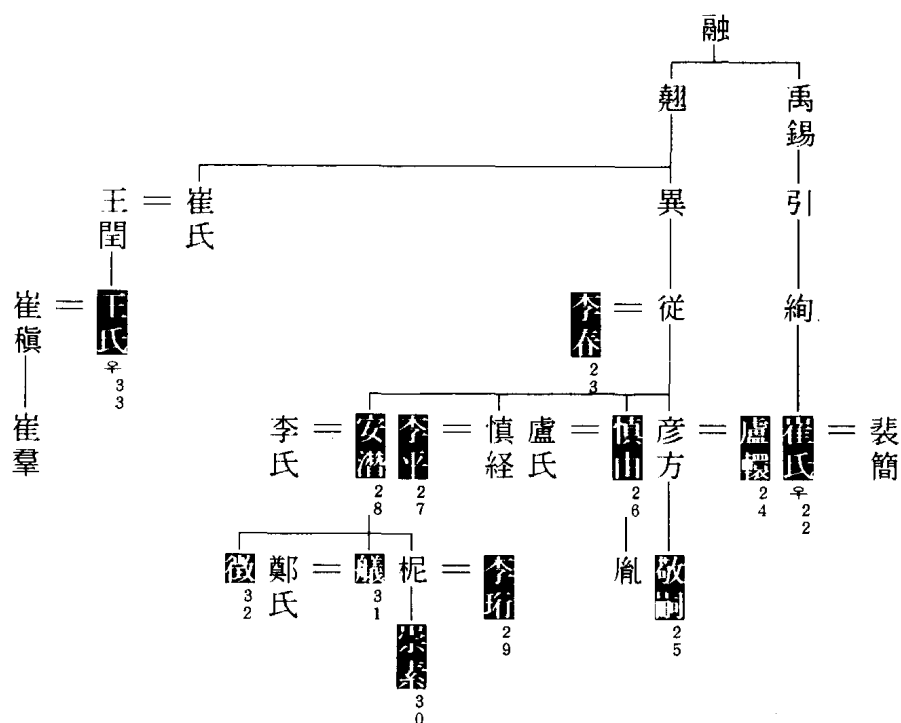
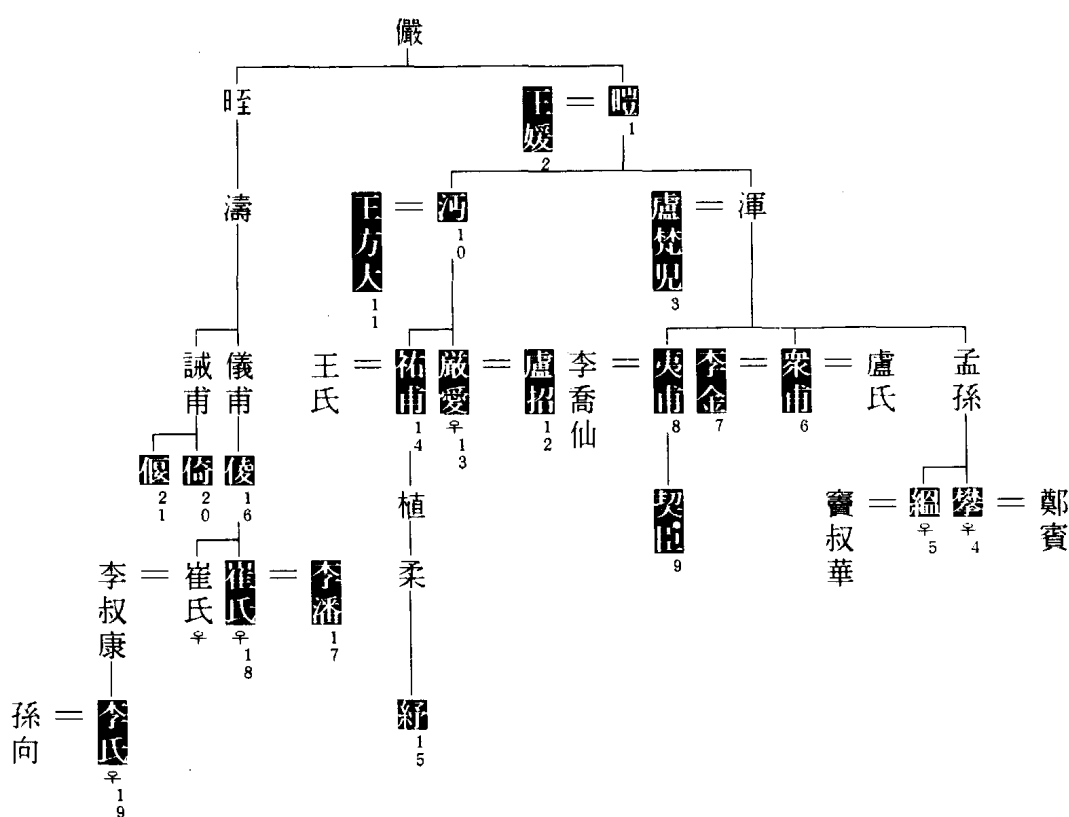
(109) 『旧唐書』卷三三、「新唐書」卷八〇李皋伝参照。

(110) 「張軫誌」(A北大1・135・1・149、B開元382・天寶11)、「張漪誌」(A北大1・137、B開元381)。

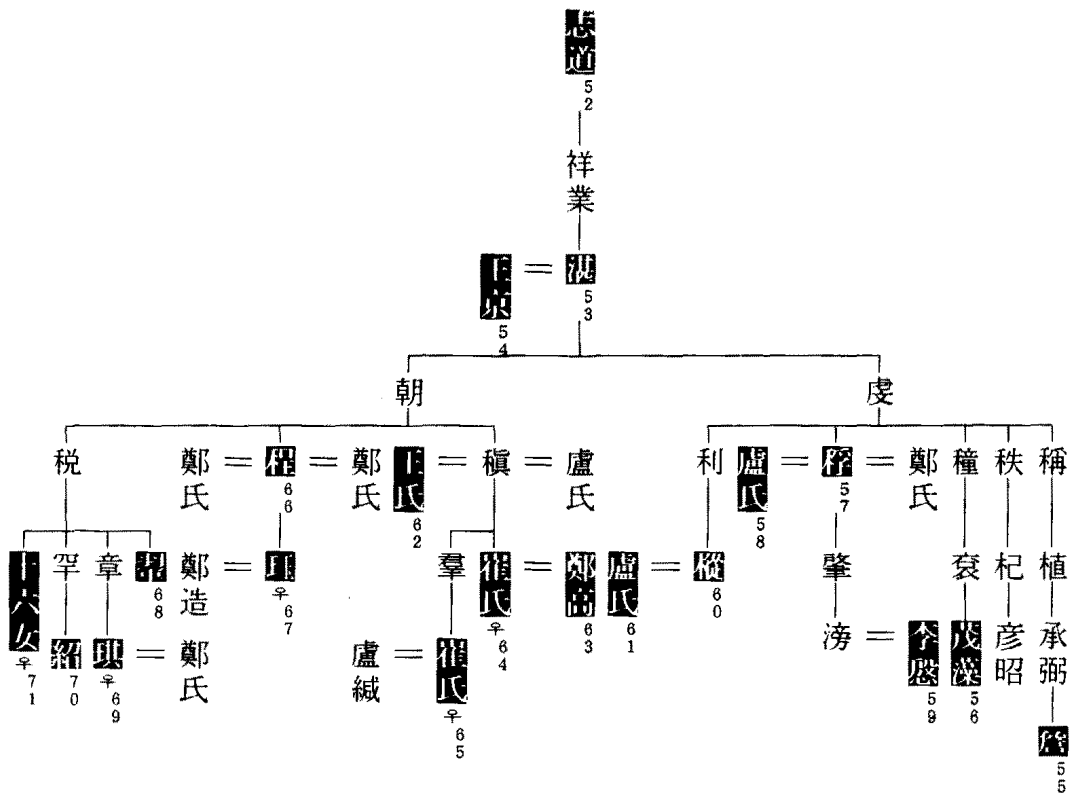
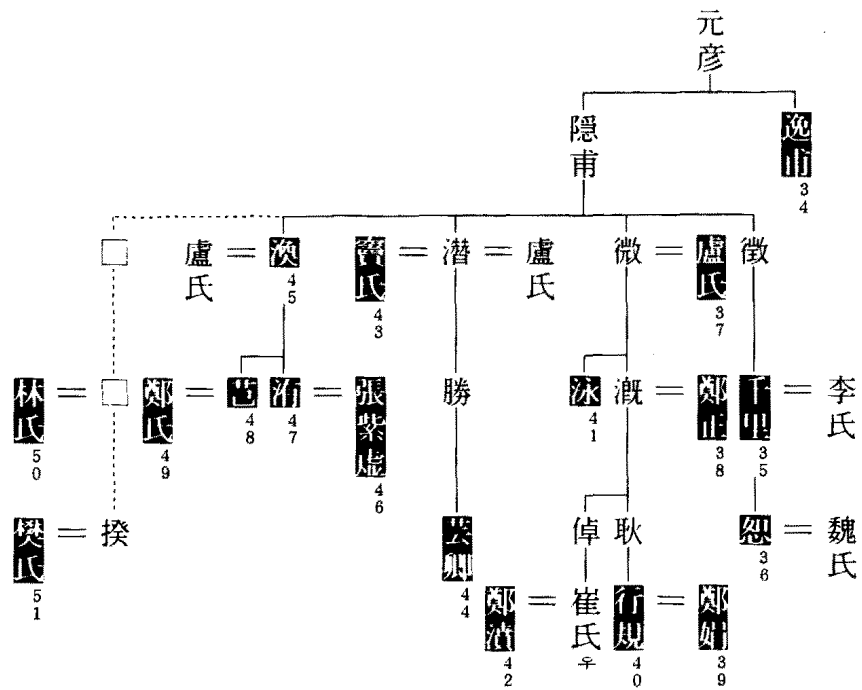
(111) 毛漢光「唐代婦女家庭角色的幾個重要階段：以墓誌為例」(鮑家麟編『中国婦女史論 第四集』、稻郷出版社、一九九五)参照。また、唐代人の平均寿命については、李燕捷『唐人年寿研究』(文津出版社、一九九四)、劉燕儷「試論唐玄宗時期的人口死亡現象——以墓誌銘為中心的探討」(『第四届唐代文化學術研討會論文集』、成功大学中文系主編、一九九九)参照。

系不明

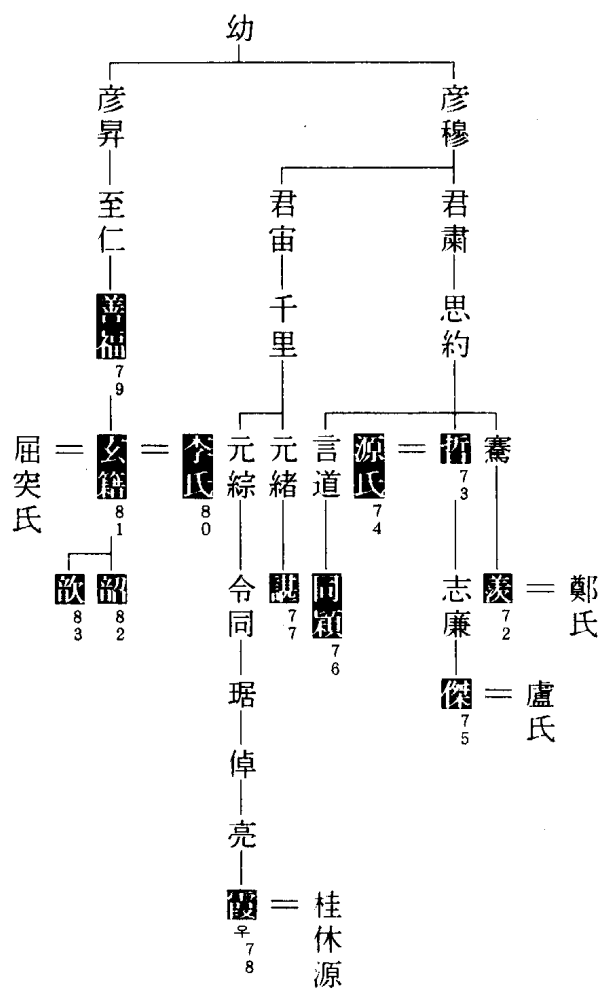
(2) 清河崔氏南祖融系



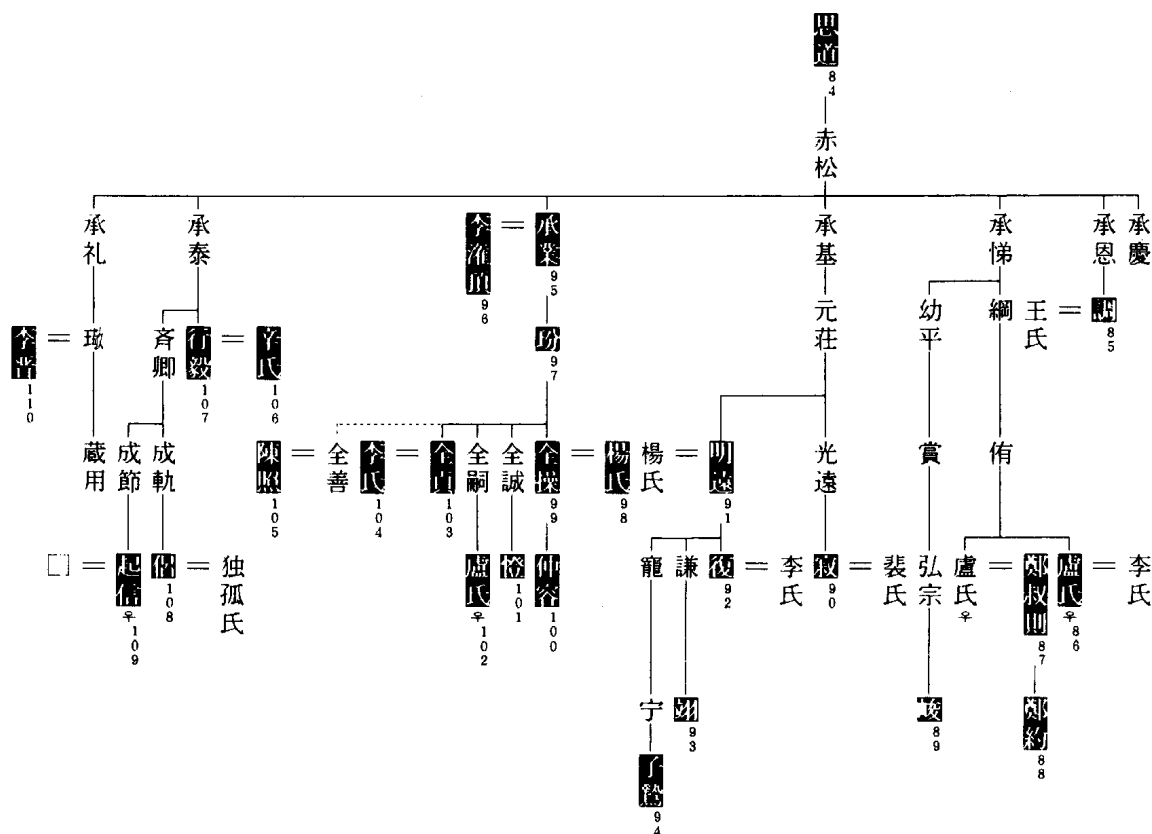
(4) 清河崔氏小房志道系



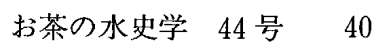
(5) 清河崔氏鄭州房幼系



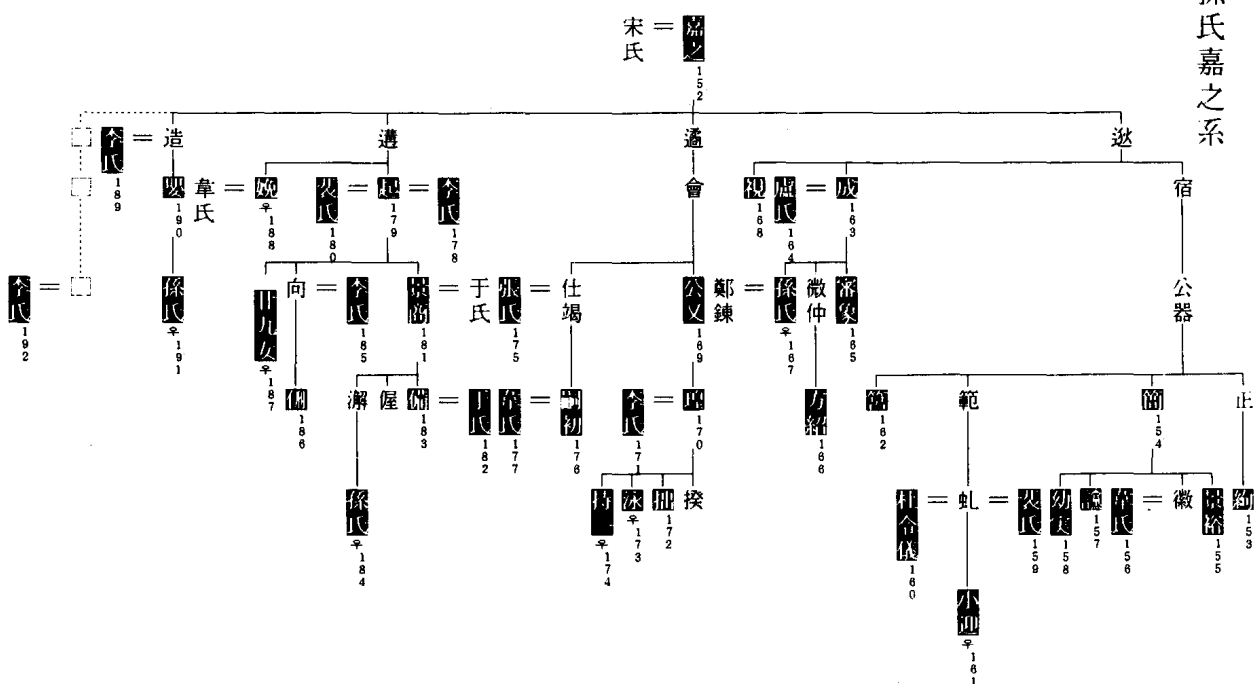
(6) 范陽盧氏北祖陽烏大房思道系



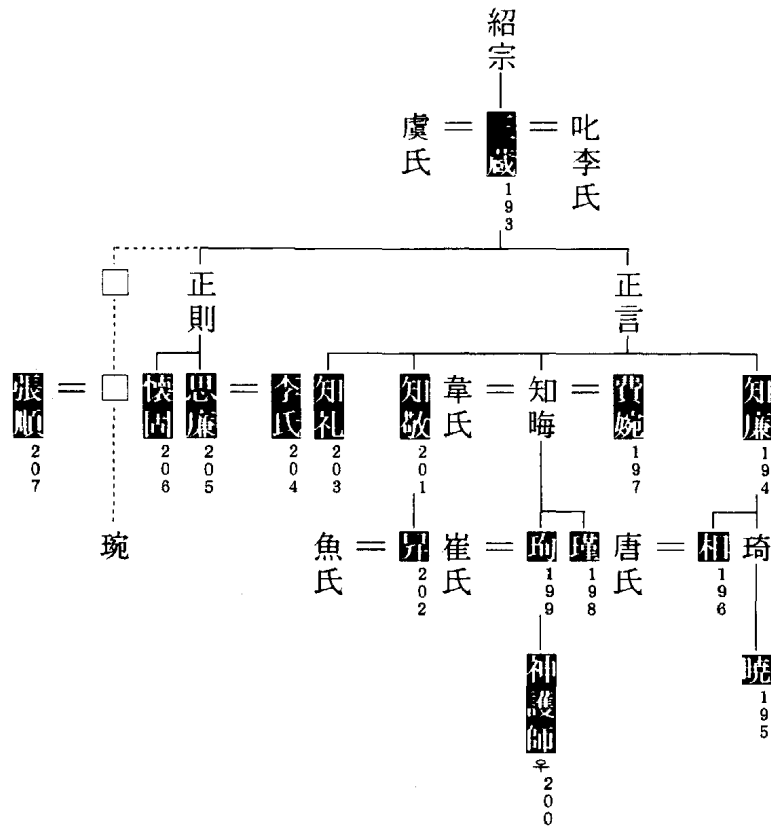
係成
1
1
4



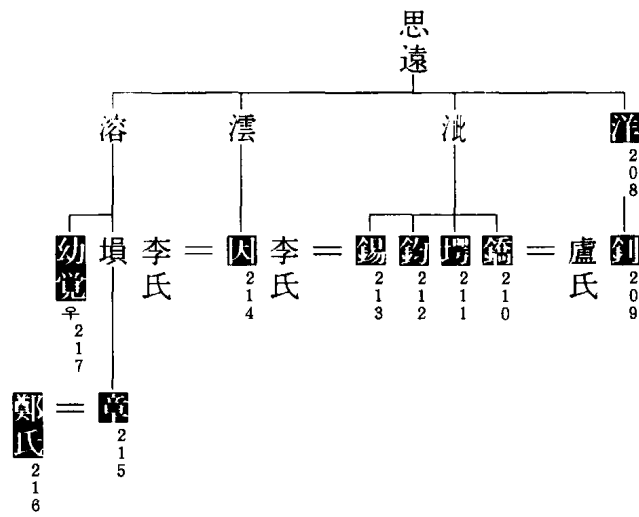
(9) 樂安孫氏嘉之系



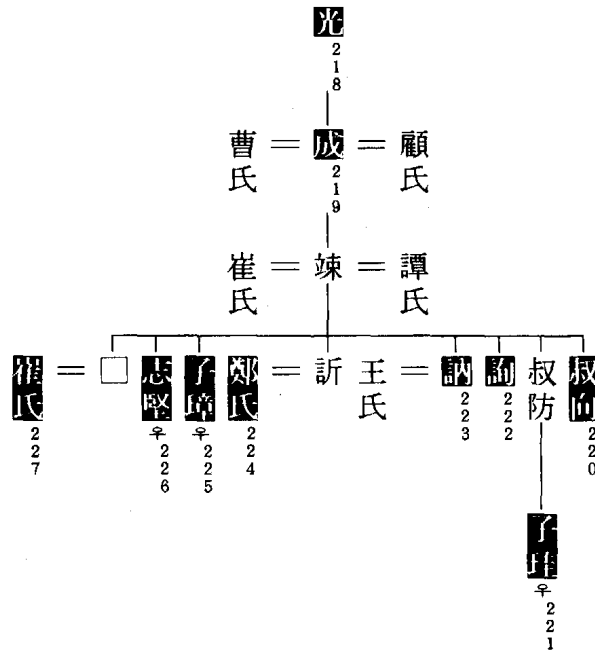
(10) 昌黎慕容氏紹宗系



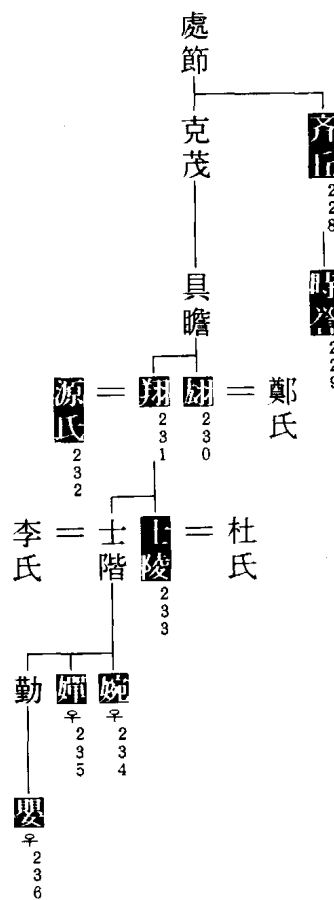
(11) 上谷寇氏思遠系



(12) 瑯琊支氏光系



(13) 安定張氏處節系



付録の注

- 1 A 洛陽 12 | 72、B 大曆 062。
- 2 A 洛陽 9 | 66、12 | 74、B 大曆 063。
- 3 A 洛陽 12 | 71、B 大曆 058。
- 4 A 洛陽 10 | 165、B 大曆 492。
- 5 A 洛陽 12 | 28、B 大曆 014。
- 6 A 洛陽 12 | 69、B 大曆 059。
- 7 A 洛陽 12 | 136、B 貞元 062。
- 8 A 洛陽 12 | 81、B 大曆 072。
- 9 A 洛陽 12 | 151、B 貞元 092。
- 10 A 洛陽 12 | 67、B 大曆 060。
- 11 A 洛陽 12 | 66、B 大曆 061。
- 12 A 北京 1 | 198、B 天宝 252。
- 13 A 洛陽 12 | 40、B 大曆 015。
- 14 A 洛陽 12 | 91、B 建中 004。
- 15 A 洛陽 14 | 160、B 咸通 104。
- 16 『全唐文』卷六五四元稹「有唐贈太子少保崔公墓誌銘」。
- 17 A 洛陽 13 | 169、B 開成 050。
- 18 A 洛陽 14 | 148、B 咸通 087。
- 19 A 洛陽 15 | 6、B 大中 095。
- 20 A 洛陽 13 | 52、B 元和 149。
- 21 A 洛陽 13 | 53、B 元和 150。
- 22 A 洛陽 13 | 17、B 元和 073。
- 23 C 100・105。

- 24 C 122 崔敬嗣誌附。
- 25 C 122。
- 26 A 北京 2 | 127。
- 27 A 洛陽 13 | 151、B 開成 017。
- 28 C 125。
- 29 A 洛陽 15 | 124。
- 30 A 洛陽 15 | 125。
- 31 A 洛陽 14 | 193、B 乾寧 007。
- 32 C 124。
- 33 本墓誌については、高橋継男「洛陽出土唐代墓誌四方の紹介と若干の考察」、『東洋大学文学部紀要』五二・二四、一九九九参照のこと。
- 34 A 洛陽 8 | 212。
- 35 A 洛陽 12 | 182、B 貞元 125。
- 36 A 洛陽 13 | 66、B 長慶 029。
- 37 『全唐文』卷七八五穆員「崔少尹夫人盧氏墓誌銘」。
- 38 A 洛陽 13 | 12。
- 39 A 洛陽 14 | 119、B 咸通 044。
- 40 A 洛陽 14 | 137、B 咸通 071。
- 41 『全唐文』卷七八五穆員「陸渾尉崔君墓誌銘」。
- 42 A 洛陽 14 | 168、B 咸通 116。
- 43 A 洛陽 13 | 28、B 元和 098、C 92。
- 44 A 洛陽 14 | 170、C 121。
- 45 A 洛陽 13 | 152、B 開成 018。

69 A洛陽14₉₅、B咸通005。
 68 A洛陽14₄₇、B大中090。
 67 A洛陽13₄₂、B元和129。
 66 A洛陽12₁₅₃、B貞元096。
 65 A洛陽14₇₁、B大中128。
 64 A洛陽12₂₀₁、C88。
 63 A洛陽12₁₈₇・13₅₉、C87・95。
 62 同注33。
 61 A洛陽14₄₁、B大中080。
 60 A洛陽13₃₅、B大和013。
 59 A洛陽14₁₇₉、B乾符017。
 58 A洛陽14₁₀₂、B咸通015。
 57 B元和101。
 56 A洛陽14₁₇₄、B乾符004。
 55 A洛陽14₁₉₄。
 54 A洛陽11₁₈₉、B天宝216。
 53 A洛陽11₁₅₄、B天宝180。
 52 A洛陽6₈₅、B永淳022。
 51 A洛陽14₁₄₀、B咸通076。
 50 A洛陽13₁₆₅、B開成044。
 49 A洛陽13₁₃₈、B大和093。
 48 A洛陽14₃₁、B大中063。
 47 A洛陽11₁₄₀、B開成001。
 46 A洛陽14₁₆₃、B咸通107。

91 A洛陽11₉₁、B天宝112。
 90 A洛陽12₁₃₂、B貞元056。
 89 古与文物』一九九三(一) 参照のこと。
 88 『全唐文』卷七八五穆員「河南府洛陽県主簿鄭君墓誌銘」。
 87 『全唐文』卷七八四穆員「福建觀察使鄭公墓誌」。
 86 『全唐文』卷五〇四權德輿「潤州丹陽県尉李公夫人范陽盧氏墓誌銘并序」。
 85 A洛陽8₂₀₂、B開元028。
 84 『全唐文』卷二二七張説「齊黃門侍郎盧思道碑」。
 83 A洛陽7₁₃₇、B聖曆013。
 82 A洛陽7₁₃₈、B聖曆012。
 81 A洛陽7₁₃₆、B聖曆010。
 80 A洛陽7₁₃₅、B聖曆011。
 79 A洛陽7₁₃₂。
 78 A洛陽13₁₄₈、B開成013。
 77 A洛陽10₁₃₅、B開元449。
 76 B開元087。
 75 A洛陽11₁₅₂・12₈₀、B天宝178・大曆070。
 74 A洛陽8₂₀₄、B開元030。
 73 A洛陽7₁₈₉、B久視015。
 72 A洛陽10₁、B開元302。
 71 A洛陽12₁₉₆、B元和001。
 70 A洛陽14₁₈₂、B乾符019。

108 107 106
 A 洛陽 9 | 194、B 開元 281。
 A 洛陽 7 | 199、B 大足 008。
 A 洛陽 13 | 15、C 89。本墓誌については、森部豊「河北藩鎮における范陽盧氏の動向——盧侶墓誌銘訳注を中心に」(『史峯』八、一九九九) 参然照のこと。

105 104 103 102 101 100 99 98 97 96 95 94 93 92
 A 洛陽 11 | 66、B 天宝 074。陳照の夫盧全善が盧玢の子と同じ、名前は「全」という字が入っていることから、盧全善は盧玢の子の可能性がある。また、陳照と前夫徐氏の間の子徐崑と盧仲容墓誌(同注100)の執筆者徐崑は同一人物とすれば、陳照は范陽盧氏陽烏大房と繋がっている可能性がある。
 A 洛陽 11 | 1、C 55。
 A 洛陽 11 | 162、B 天宝 186。
 A 洛陽 12 | 13、B 聖武 002。
 A 洛陽 11 | 164、B 天宝 194。
 A 洛陽 12 | 7、B 乾天 009。
 A 洛陽 10 | 112、B 開元 421。
 A 洛陽 11 | 182、B 天宝 208。
 A 洛陽 8 | 154、B 景雲 014。
 A 洛陽 6 | 109、B 光宅 006。
 A 洛陽 5 | 133、B 咸亨 059。
 A 洛陽 13 | 74、B 宝曆 007。
 A 洛陽 12 | 185、B 貞元 133。
 A 洛陽 11 | 190、B 天宝 154。

132 131 130 129 128 127 126 125 124 123 122 121 120 119 118 117 116 115 114 113 112 111 110 109
 A 洛陽 14 | 45、B 大中 088。
 A 洛陽 13 | 115、B 大和 046。
 A 洛陽 13 | 60、B 長慶 023。
 A 洛陽 13 | 114、B 大和 044。
 A 洛陽 14 | 185、B 天宝 022。
 A 洛陽 13 | 104。
 『全唐文』卷八〇九司空圖「故太子太師致仕盧公神道碑」。
 A 洛陽 13 | 122。
 同注 56。
 A 洛陽 13 | 82、B 宝曆 021。
 A 洛陽 13 | 168、B 開成 049。
 A 洛陽 13 | 99、B 大和 022。
 A 洛陽 14 | 166、B 咸通 113。
 A 洛陽 14 | 43、B 大中 083。
 A 洛陽 13 | 100、B 大和 021。
 A 洛陽 10 | 73、B 開元 379。
 A 洛陽 10 | 162、B 開元 491。
 A 洛陽 12 | 194、B 永貞 006。
 A 洛陽 12 | 112、B 貞元 026。
 A 北京 1 | 14。
 A 北大 1 | 24、B 武德 004。
 A 北京 1 | 13。
 A 洛陽 9 | 142、B 開元 221。
 A 洛陽 11 | 215。

- 133 同注26。
 134 B 咸通057。
 135 A 洛陽13 | 43、B 元和131。
 136 A 洛陽13 | 9、B 元和053。
 137 A 北京2 | 116、洛陽14 | 77、14 | 92、B 大中138、咸通001。
 138 A 洛陽14 | 3、B 大中003。
 139 A 洛陽1 | 126。
 140 A 洛陽1 | 99。
 141 A 洛陽1 | 98。
 142 A 北大1 | 87、B 天授039。
 143 A 北大1 | 137、B 開元381。
 144 B 開元513。
 145 A 北大1 | 135、1 | 149、B 開元382、天寶111。
 146 A 北大1 | 136、B 開元380。
 147 A 北京2 | 46、B 元和067。
 148 A 北京1 | 94、B 天授040。
 149 A 北京1 | 95、B 天授041。
 150 A 北大1 | 155、B 天寶221。
 151 A 北大1 | 88、B 天授042。
 152 『全唐文』卷三十三孫逖「宋州司馬先府君墓誌銘」。
 153 A 洛陽14 | 173。
 154 A 洛陽13 | 83。
 155 A 洛陽14 | 145、B 咸通084。
 156 B 大中151。

- 157 A 洛陽15 | 7、B 殘誌015。
 158 A 洛陽14 | 190、B 広明006。
 159 A 洛陽14 | 161。
 160 A 洛陽14 | 127、B 咸通060。
 161 A 洛陽14 | 136、B 咸通069。
 162 A 洛陽14 | 89、B 大中163。
 163 同注114。
 164 同注115。
 165 A 洛陽13 | 177、B 会昌010。
 166 A 洛陽14 | 135、B 咸通068。
 167 A 洛陽12 | 202、B 元和015。
 168 A 洛陽12 | 24、B 顯聖002。
 169 A 洛陽14 | 25、B 大中054。
 170 A 洛陽14 | 155。本墓誌については、閻金安「孫瑋墓誌介紹」
 （『交物』一九九五・一一）参照のこと。
 171 A 洛陽14 | 68、B 大中125。
 172 A 洛陽15 | 135。
 173 A 洛陽14 | 154、B 咸通099。
 174 A 河南129。
 175 A 洛陽14 | 22、B 大中042。
 176 A 洛陽14 | 123、B 咸通053。
 177 A 洛陽14 | 88、B 大中161。
 178 A 洛陽13 | 166、B 開成046。
 179 A 元和058。

203	202	201	200	199	198	197	196	195	194	193	192	191	190	189	188	187	186	185	184	183	182	181	180
A 洛陽 5 151、	A 洛陽 7 156、	A 洛陽 5 150、	A 洛陽 11 150、	A 洛陽 10 126。	A 洛陽 10 44、	A 洛陽 7 155、	A 洛陽 10 17。	A 洛陽 12 4、	A 洛陽 7 157、	A 洛陽 5 149、	A 洛陽 12 180、	A 洛陽 12 171、	A 洛陽 12 170、	A 洛陽 12 40、	A 洛陽 13 2、	A 洛陽 14 33、	A 洛陽 14 48、	同注 19。	A 洛陽 14 169、	A 洛陽 13 172、	A 洛陽 14 118、	A 洛陽 14 66、	A 洛陽 13 178、
B 咸亨 076。	9 14、B 聖曆 034・開元 059。	B 咸亨 077。	B 天宝 177。		B 開元 346。	B 聖曆 033。		B 乾元 002。	B 聖曆 032。	B 咸亨 075。	B 貞元 122。	B 貞元 114。	B 貞元 113。	B 貞元 022。	B 元和 039。	B 大中 065。	B 大中 092。		B 咸通 117。	B 会昌 004。	B 咸通 040。	B 大中 120。	B 会昌 011。

227	226	225	224	223	222	221	220	219	218	217	216	215	214	213	212	211	210	209	208	207	206	205	204
A 洛陽 14 104、	A 洛陽 14 105、	A 洛陽 14 58、	A 洛陽 14 176、	A 洛陽 14 188、	A 洛陽 14 61、	A 洛陽 14 57、	B 大中 111。	A 洛陽 14 59、	A 洛陽 11 60、	A 洛陽 12 175、	A 洛陽 13 128、	A 洛陽 14 17、	A 洛陽 11 223、	A 洛陽 12 76、	A 洛陽 9 165、	A 洛陽 9 146、	A 洛陽 11 23、	A 洛陽 9 110、	A 洛陽 11 111、	A 洛陽 7 154、	A 洛陽 8 13、	A 洛陽 8 172、	A 洛陽 7 90、
B 咸通 019。	B 咸通 020。	B 大中 113。	B 乾符 009。	B 乾符 033。	B 大中 112。	B 大中 114。		B 大中 110。	B 天宝 109。	B 貞元 117。	B 大和 074。	B 大中 031。	B 天宝 261。	B 大曆 064。	B 開元 250。	B 開元 226。	B 天宝 025。	B 開元 182。	B 天宝 136。	B 聖曆 035。	B 長安 032。	B 太極 007。	B 万歲通天 013。

228	A 洛陽 9 8、	B 開元 052。
229	A 洛陽 10 60、	B 開元 356。
230	A 洛陽 12 88、	B 建中 001。
231	A 洛陽 12 89、	B 建中 002。
232	A 洛陽 12 143、	B 天宝 074。
233	A 洛陽 13 33、	B 元和 104。
234	A 洛陽 3 210、	B 顯慶 079。
235	A 洛陽 13 164、	B 開成 041。
236	A 洛陽 14 52、	B 大中 099。

以上の系図は氣賀澤保規氏の『唐代墓誌所在総合目録』（汲古書院、一九九七）に載る墓誌を中心に、愛宕元氏の「唐代范陽盧氏研究——婚姻関係を中心に」（川勝義男・礪波護編『中国貴族制社会の研究』、京都大学人文科学研究所、一九八七）と趙超氏の『新唐書宰相世系表集校』（北京中華書局、一九九八）を参考して、作成したものである。

（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科後期博士課程）